



南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催
公開シンポジウム2012 講演録

私たちは他人を 助けるべきか

—非常時の社会・心理・倫理

奥 鈴木
田 木
太 郎 真
編

南山大学社会倫理研究所
2013年

南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催
公開シンポジウム 2012 講演録

私たちは他人を助けるべきか 非常時の社会・心理・倫理

鈴木 真・奥田 太郎 編

南山大学社会倫理研究所
2013 年

はじめに

本書は、2012年9月15日に南山大学にて開催された、南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催公開シンポジウム「私たちは他人を助けるべきか―非常時の社会・心理・倫理」の記録である。

2011年3月11日に東日本を襲った大地震と津波は、「私たちは他人を助けるべきか」という最も典型的な倫理的問いを一人ひとりの人間に対して突きつけることとなった。震災後、現地に居合わせた人びとへの聴き取り調査などから明らかになってきたと言われるのは、災害時においてかなり多くの人びとが自らの安全性を棚上げにして利他的な行動をとっていた、という事実である。

平時に私たちが思い描く災害時の行動イメージは、“誰もが自分が助かるために他人を蹴落としながら醜く生き延びようとする”といったものであると思われるが、現実には、そうした現象はあまり見られなかったと言われている。未曾有の巨大災害は、普段私たちが問わずに済ませがちな非常時の社会・心理・倫理の実相を露にしたとも言えよう。今後を生きる私たちにとって、そうした事柄について改めて問い直してみることは、復興や電力問題などの喫緊の課題と並んできわめて重大な社会的課題であるように思われる。

こうした問題意識から、本シンポジウムは、「私たちは他人を助けるべきか」という問いについて、様々なアプローチから迫り、私たちの利他行動に対する理解をより確かなものにすることを目指して企画された。ご登壇いただいた3人の提題者の方々、および、シンポジウムでの討論に質問紙を介して加わり議論を深めて下さった参加者の方々との共同作業により、当初の目的は十二分に達成された。皆さまに感謝申し上げたい。

また、本シンポジウムの開催から本講演録の刊行に至るまで、きめ細やかな配慮のもと尽力して下さった社会倫理研究所事務局の井上千織さんと鬼頭恵美さんにこの場を借りて感謝申し上げたい。

鈴木 真・奥田 太郎

目次

はじめに			iii
開会の挨拶	南山大学社会倫理研究所長	丸山雅夫	1
開会の挨拶	上智大学生命倫理研究所長 (代読)	青木 清 町野 朔	3
趣旨説明		奥田太郎	5
人はなぜ赤の他人を助けるのか？ —「おせっかいなサル」の行動学		小田 亮	10
津波てんでんこと災害状況における倫理		児玉 聡	31
専門援助職が助けられなかった時 —災害時の援助職における罪悪感とその対処		久田 満	48
全体討論	司 会 討論者	奥田太郎 小田 亮 児玉 聡 久田 満	59

開会の挨拶



丸山雅夫
南山大学社会倫理研究所長

皆さん、こんにちは。本日は暑い中、また三連休の初日にもかかわりませず、社会倫理研究所の公開シンポジウムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

上智大学と南山大学の関係については、ご存じの方も多いとおもいますが、もう40年以上も前から毎年、総合対抗運動大会（上南戦）を行っておりまして、南山大学がいまだにかなりの負債を負っております。こうした関係のもとで、学術的にも何か交流ができないかという話がおこり、上智大学に生命倫理研究所が設立されたのを機に、南山大学の社会倫理研究所との共催で、当面は年に1回のシンポジウムを開催しようと

いうことになりました。

昨年度は上智大学を会場にして、広い意味での脳科学についてのシンポジウムを行いました。本年度は南山大学が会場ということで、何をテーマにすべきかで非常に悩みました。その結果、1年半前に起こった東日本大震災の問題を、現時点で一回レビューする必要があるのではないかという結論に達し、本日のシンポジウム開催に至った次第です。

もちろん原発の問題などは、いろいろな人がいろいろなところで発言できますし、発言したがる人もたくさん見受けられます。しかし、本日はそういう問題ではなく、ご案内にありますように、「私たちは他人を助けるべきか」というテーマにもとづいて、非常時に当たって当事者は一体どのように行動したらいいか（すべきか）ということを改めて考え、問い直してみたいと思っております。若干誤解を招きかねないテーマではありますが、シンポジウムの趣旨等につきましては、後ほど総合司会の奥田から説明をさせていただきますので、私からは割愛させていただきます。

4時間という、ある意味長く、ある意味で短い時間ではございますが、フロアの皆さんと一緒に有意義な議論ができればと願っておりますので、積極的にご参加いただければと思います。では、活発な議論がなされることを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。■

開会の挨拶



青木 清
上智大学生命倫理研究所長

代読：町野 朔
上智大学生命倫理研究所

このたび、南山大学社会倫理研究所と上智大学生命倫理研究所の共催により、公開シンポジウム2012「私たちは他人を助けるべきか—非常時の社会・心理・倫理」が開催されますことは、誠に喜ばしい次第です。わが国は2011年3月11日に発生した東日本大震災により、多大な被害を被りました。この大震災による体験は、日本人に多くの課題をもたらしました。それらは、原子力発電所の事故に伴う環境汚染をはじめとして、個人として社会として人間的、経済的、物質的な面での生活再建の課題です。大震災から1年半たちましたが、いまだ被災地は生活再建のために闘っている状態です。このような状況にあって、本日のシンポジウム

のテーマは的を射たものであると思います。

昨年、私たちの研究所の先輩に当たる南山大学社会倫理研究所と話し合いまして、両研究所で共催してシンポジウムを持ち回りで開催することにいたしました。9月には第1回目として、上智大学におきまして、「脳科学に何が期待できるか？—脳研究の最前線と倫理」を開催いたしました。このような形態でカトリック系の両大学が連携して学術的な交流を図ることは、大変意義のあることと思います。

大震災後、わが国では「絆」という言葉が多くの中で使われていますが、絆という言葉が意義を持つのは、本日のようなシンポジウムを介して、多くの方が人間としての利他的行動を理解して、人間の生存を守る意義を認識するところにあると思います。

最後になりましたが、本シンポジウムが成功されることを祈念しています。■

趣旨説明



奥田太郎

南山大学社会倫理研究所

本日のシンポジウムに関する趣旨説明を簡単にさせていただきます。

通常、「他人を助けるべきか」と聞かれれば、「そうすべきに決まっているでしょう」と思うのが、人として普通のことであろうと思われます。しかし、この答えはそれほどに自明なことかということは、2011年の震災も含め、さまざまな災害が発生したことを契機に、疑問に付される場面が意外とあります。いかなる場合でも、私たちは他人を助けるべきだという答えを出せるでしょうか。

例えば、東日本大震災では、他人を助けに行って逃げ遅れ、津波等で命を失った人たちが少なくなかったと聞いております。そのように、自

分の命が脅威にさらされているにもかかわらず、なぜ私たちは他人を助けてしまうのか。そういう問い掛けがなされると思います。そこで、問い直しとして、そのような非常時でも私たちは他人を助けるべきかということが、大きな問いとなります。

今のは自分と他人の区別ですが、もう一つ、「他人を助けるべきか」という問いが持っている含意として、身内と他人という区別があると思います。身内を優先するのは、通常、えこひいきだと考えられることがありますが、非常時、とりわけ命が懸かっているときに、赤の他人ではなくて自分の身内の命を助けようとするのは、いけないことなのでしょうか。

普通に考えてみて、身内を大切にできない人を、私たちは人として高く評価しないということもあると思います。身内を優先するというのは、人情として受け入れ可能なことでしょう。そう考えれば、他人を助けるべきだということは、それほど自明ではありません。他方で、他人を助けることを職務とする人もおります。そうした人たちは、自分の身内を巻き込むような非常時において、特に命が懸かるような状態では、他人を助けるべきかという問いの深みに苦しめられることがあるでしょう。

また、本日のテーマからは若干逸れますが、「助けるべき他人とは誰か」という問題もあります。目の前の人と遠くの100万人という対比です。海外で臓器移植を受けなければ命を失ってしまうような一人の子どもがいたとして、その子の実名が付いた写真が公表され、「彼（あるいは彼女）のためにお金をください」と言えば、億単位の募金が集まるということがあります。しかし他方で、遠くの国で飢餓に苦しむ100万人の子どもたちがいるという場合に、募金を募ったところで、一人一人に対してはそれほど額が集まらない。もう少し極端な例はいろいろ挙げられますが、そういった実名写真付きの子どもは助けるべき他人であって、100万人の子どもは助けるべき他人として軽く見られているのかといったようなことを考えると、「私たちは他人を助けるべきか」という問いの中に含まれている、「他人とは一体誰か」ということが大きな問題になろうかと思います。

こうした「私たちは他人を助けるべきか」という大きな問い掛けを非常時ということに照らして考えていくというのが、今回のシンポジウム

のテーマであり、それはすなわち、私たちの利他性を考えることです。ですから、今回の震災のことも話題に上ると思いますが、広くは、私たち人間が他人を利するために行動することそのものをどう理解するのかということが、このシンポジウムの一番根本的な問題提起であり、皆さんと一緒に考えたい問題です。誰かが誰かを助けるということは、分かっているようでいて、よく分かっていないことだと思います。今日はさまざまなアプローチからの考察に触れて、利他行動への理解を深めたいと思います。それは、自分たちについてよりよく知ることにもつながるでしょう。

では簡単に、今日の提題者の紹介を致します。まず、第1報告者は、小田亮先生です。小田先生は名古屋工業大学の准教授で、自然人類学、比較行動学をご専門とされておられます。本日は、自然科学的なアプローチで、人はなぜ赤の他人を助ける行動特性を持つのかという謎に挑んでいただきます。著書としては、まさに今回のシンポジウムのテーマそのものですが、『利他学』（新潮選書）も最近出しておられますので、ご関心のある方はぜひお読みください。

第2報告者の児玉聡先生は、東京大学大学院の医学系研究科で生命倫理の講師をなさっています（2012年9月現在）。10月より京都大学の倫理学の准教授になられる予定で、倫理学、政治哲学をご専門になさっています。本日は哲学的なアプローチで、他人を助けることの心理と倫理のせめぎ合いについて分析していただくということをお願いしています。また、児玉先生はごく最近、『功利主義入門—はじめての倫理学』（ちくま新書）を出しておられますので、ぜひ手に取っていただきたいと思います。

最後の提題者、久田満先生は、上智大学の教授で、臨床心理士でいらっしやいます。臨床心理学、コミュニティ心理学がご専門です。本日は臨床心理学的なアプローチで、専門職として他人を助けられなかった人たちの心理について、実際に見聞きしたことを基に語っていただきます。『よくわかるコミュニティ心理学』（ミネルヴァ書房）という教科書の編纂にも携わっておられます。それでは皆さん、お楽しみ下さい。■

南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催
公開シンポジウム2012

「私たちは 他人を 助けるべきか」

— 非常時の社会・心理・倫理 —

入場無料
予約不要

日時: 2012年9月15日(土) 14:00~18:00 (受付開始13:30)

会場: 南山大学名古屋キャンパスB棟2階 B21教室

主催: 南山大学社会倫理研究所 共催: 上智大学生命倫理研究所

第1
報告

人はなぜ赤の他人を助けるのか?
—「おせっかいなサル」の行動学—

小田 亮

名古屋工業大学工学部工学研究科 准教授 倫理人文学、比較行動学

第2
報告

津波ででんこと
災害状況における倫理

児玉 聡

南山大学大学院宗教学系研究科 講師 倫理学、生命倫理学、政治哲学

第3
報告

専門援助職が助けられなかった時
—災害時の援助職における
罪悪感とその対処—

久田 満

上智大学総合人間科学部 教授 コミュニティ心理学、臨床心理学

【司会】奥田 太郎 南山大学社会倫理研究所 准教授

昨年東日本を襲った大津波と津波を経て、「私たちは他人を助けるべきか」という典型的な倫理的問いが私たち一人ひとりに対して突きつけられています。たとえば、震災の渦中で、誰かが自分が助かるために他人を犠牲にしなから生き延びようとするという一般的なイメージに反して、かなり多くの人が自らの安全性を犠牲にして利他的な行動をとっていたとされています。しかし、他方で、他人を助ける職業に就きながら自身の安全を固く守ろうとしたことで、他人を助けられなかった後、めたさに留まる人々も少なくありません。災害有るの巨大災害が垣間見せた、非常時の社会・心理・倫理の真相について今改めて問い直してみることが、今後を生きる私たちにとって、災害復興や電力問題などの喫緊の課題と並んできわめて重大な課題なのです。

また、海外での難民移住のために、人の子供に対しては、虐待的な虐待行為が蔓延する一方で、アフリカで飢饉に苦しむ多くの子どもたちに対しては十分な寄付金が集まらないうちをわれわれも、緊急事態に陥った具体的な個人を前に利他的な行動をとることは、きても、過剰な特定多数の人の目に對して同じようには利他的な行動をとることができないという、私たちが助けるべき他人とは、いかに異なるのでしょうか。

本シンポジウムでは、「私たちは他人を助けるべきか」という問いに様々なアローから取り組み、私たちの利他的行動に対する理解をより確かなものにすることを目指します。

お問い合わせ先

南山大学社会倫理研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 TEL:052-832-3111 FAX:052-832-3703

www.ic.nanzan-u.ac.jp/ISE/index.html

ise-office@ic.nanzan-u.ac.jp

2012 Thousand Designs Inc.

人はなぜ赤の他人を助けるのか？ —「おせっかいなサル」の行動学



小田 亮

皆さん、こんにちは。名古屋工業大学の小田です。南山大学と上智大学の皆さんには、お招きいただきましてありがとうございます。

実は、昨日まで被災地に行っておりました。これは一昨日撮ったばかりの写真で、南三陸町の防災庁舎です。ここの2階におられた役場の職員が身を呈して、津波が来るという防災無線の放送を続けて、最終的には津波にのまれてしまったという有名な話があります。

これは人間の利他行動の非常に極端な例と言えると思うのですが、こ

こまで極端な例ではなくても、われわれは普段から、いろいろな形で人のために何かをするということをしています。例えば募金やボランティアをされた方もこの中にいらっしやると思うのですが、そういった形での利他行動もあります。

普段われわれは募金やボランティア等で利他性を示しているわけですが、これを実験室で調べる方法があります。その1つが「独裁者ゲーム」と呼ばれているものです。これは、実験室に来てもらった実験参加者にある一定の額のお金を渡して、「ほかの人と自由に分け合ってください」と言い、いくら渡したかでその人の利他性を測ろうという実験です。

われわれがやった例を紹介します。700円（100円硬貨7枚）を実験参加者に渡します。「これをあげますから、ほかの参加者と分け合ってください。ただ、分ける相手は誰か分かりません。向こうも、あなたが誰だか分かりません。分けた相手とは、後で顔を合わせることも全くありません」という状況にします。実験者にも金額がなかなか分からないような形になっているのですが、合理的に考えると、1円もあげないのが一番いいわけです。もし人間が合理的にできているのなら、1円も渡しませんよね。誰だか分からない相手ですし、向こうも自分が誰だか知らないし、後腐れもないのですから、普通、1円も渡さないのが一番合理的です。

ところが、大学生55人を使って実際に実験をしてみたところ、みんないくらか渡すのです。一番多いのが200円～300円です。「700円を分け合ってください」と言うと、多くの人が大体200～300円ぐらいを相手に渡す。全然あげないという人はあまりいない。これは合理的に考えると非常に変なことなのですが、こういった形で、人はもともと利他性を持っているのだということが実験的に分かります。

独裁者ゲームは、世界のいろいろなところで行われています。われわれ以外にも多くの研究者が実験を行っています。世界のいろいろな地域の、いろいろな環境に住んでいる、いろいろな生業の人たちに対して、同じような独裁者ゲームをやるわけです。もちろん、それぞれ所得が違いますから、例えば、そこの平均的な給料の何割という形で合わせます。

そうすると、全部取ってしまう人はやはりいません。いろいろなところでやっても、みんないくらかを相手に渡すということが分かっています。ということは、人間というのはかなり普遍的に利他性を持っているのではないか。文化や社会の状況によって変わるのではなく、ヒトの生物学的な特徴として利他性というものがあるのではないかと考えられるわけです。

私に興味があるのは、なぜヒトはこんなに利他的なのだろうかということです。今日のテーマは、人を助けるべきかということなのですが、私の話のテーマは、助けるべきかどうかではなくて、そもそもなぜわれわれはこんなに利他的なのか、なぜ困った人がいると助けてしまうのかということです。

そういう話をすると、大体みんな、「それはお互いさまだよ」と答えます。助け合いの精神があるというわけですね。「お互いさまだと思っているから、困っている人を見たら助けるんだ」と答えるのですが、では、なぜそんなものがあるのか。もっと深く考えると、なぜわれわれはそれをそもそもお互いさまと思うのだろうかということが今度は疑問になってきます。

生物学者としての私の結論はこうです。おそらく進化の結果、われわれに生物学的な特徴として備わっている。鳥が空を飛んだり、魚が海を泳いだりしているように、われわれは人を助ける。そういう動物なのではないかというのが結論です。

ここから進化の話に入っていきます。生物の進化は、一般の人にはかなり誤解されているところがあるので、少し進化についての説明をします。われわれはヒトという生物ですが、生物は全て進化します。それから、進化イコール進歩だと思っている人がとても多いですが、そうではありません。生物の進化というのは、必ずしも進歩ではありません。

なぜそんな大きな誤解があるのか。これらはウェブ上にあるカメラとゴルフクラブの広告ですが、こういった広告では、「進化」という言葉が「進歩」と同じ意味で使われています。あるいは、スポーツ新聞などを見ると、よくイチローが進化していたりするわけですが、それは全て「進歩」

と同じ意味で使われています。それなら「進歩」と言え、と思うのですが。

このように使われているので、「進化」イコール「進歩」だと思っている人が非常に多いのですが、生物学的には、進化というのは必ずしも進歩ではありません。なぜかという、進化は遺伝子に起こる偶然の変化の積み重ねなのです。遺伝子には時々、突然変異といって、偶然の変化が起こります。それがどんどん蓄積していくと、当然その生物の特徴も変わっていく。それが進化です。ですから、進化は、どちらの方向に向かうか分からないわけです。単純なものが複雑になったり、下等なものが高等になったりするのが進歩ですが、進化の場合は、必ずしもそうではない。偶然の変化の積み重ねです。

まずそれを理解していただきたいと思います。さて、次に疑問になるのは、なぜ生物はこんなに複雑で機能的なのかということです。われわれの体もそうです。非常に複雑にできています。それから、動物はみんな、ある環境の下で非常にうまく振る舞うようにできています。

では、偶然の変化の積み重ねなのに、なぜそんなに機能的なものが生まれるかという、もう1つプロセスが必要になります。それが、自然淘汰、あるいは自然選択と言われているものです。チャールズ・ダーウィンという19世紀のイギリスの博物学者が、自然淘汰ということを最初に言い出したのですが、突然変異によって遺伝情報がばらつきます。そこに自然環境から圧力が働くことで、選択が起こります。ある環境の下でよりうまくやっていたような変化をしたものが、その遺伝子を次の世代に残していくので、それが繰り返されれば、どんどん生物の特徴は、ある環境の下でうまくやっていたようなものになっていくだろう、というのが自然淘汰の理論です。

ですから、一定の方向に変化しているわけではなく、変化自体はランダムなのですが、その中でたまたまうまくやっていたものが遺伝子を残していくので、それがどんどん残っていった、最終的にとてもうまくできたものが残るというプロセスです。この次の世代にどれぐらい遺伝子を残すかというのが、「適応度」と呼ばれているものです。ということは、当然、適応度をより高くするような特徴が進化していく。これが自

然淘汰です。

これは、自然淘汰を分かりやすく表した図（図1）です。これは、ある生物集団だと思ってください。例えば、体の色だと思ってもらってもいいのですが、赤、青、緑など、いろいろなやつが、ある世代にいます。ここで、例えば赤いやつが病気になりにくいとか、赤いやつは外敵に襲われにくいというような、何か赤いやつが優位になるような淘汰圧が自然からかかってくると、次の世代で赤いやつが少し増えます。この世代でまた同じような淘汰圧がかかると、次の世代でまた少しずつ赤が増えます。これがどんどん繰り返されていくと、この集団は赤いやつばかりになっていく。これが自然淘汰です。われわれも含めて、生物の行動も進化する。なぜなら、行動にも遺伝的な基盤があるからです。特にヒトの行動は自由意志や文化の影響を受けるので、遺伝的な基盤があると言われてもピンとこないかもしれませんが、われわれの行動にも、遺伝的な情報によって影響を受けているものがあります。

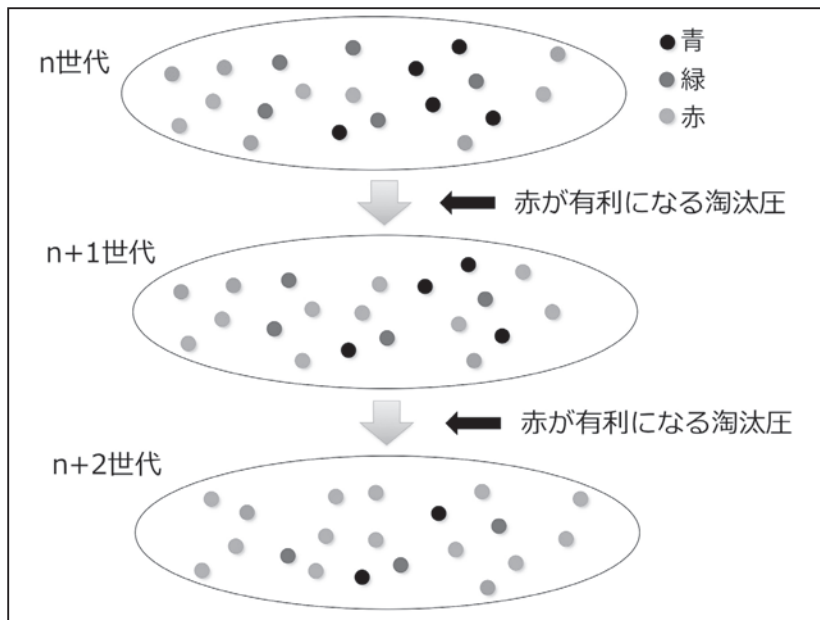


図1

動物の行動の例で言うと、一番極端なのがカッコウの托卵です。カッコウという鳥は、ほかの種の鳥の巣に卵を産み付けて、自分はどこかへ行ってしまう。そうすると、そのひなは、産み付けられた鳥の巣で育ち、巣立って行って、また托卵をするのですが、カッコウの親は卵を産み付けたらどこかへ行ってしまうので、子どもとは一切会いません。カッコウの子どもは、この行動を親から習っていないわけです。ということは、全て遺伝子の中にある。遺伝情報だけで托卵という行動をしているということになります。ですから、遺伝情報というのは、かなり複雑な行動にも影響することができます。われわれも動物ですから、同じように、われわれの行動にもかなり遺伝というものが関わっているわけです。

先ほど自然淘汰の話をしました、自然淘汰が働けば、動物の行動は、自らの適応度を上げるようなものになっていくはず。適応度が上がる特徴は残っていくわけですから。ということは、行動に自然淘汰が働けば、われわれの行動は自分の適応度を上げるようなものになっていくはず。

そこで大きな問題になるのが、なぜ利他行動が進化したのかということです。利他行動は、自分の適応度を下げて、ほかの個体の適応度を上げるというものです。単純に考えると、こんなものが自然淘汰で進化するわけがないのです。例えば、働きアリは、一生子どもを産まずに、巣のほかの個体の世話をして過ごします。自分の適応度はゼロですから、なぜこんな行動があるのかよく分からないということになってしまいます。

こうした行動の進化を考えなければいけないという話になってきます。では、利他行動はなぜ進化したのかというと、ひとつ考えられているのは、血縁淘汰理論です。これは何かというと、例えば、やり手があって、受け手に対して利他行動をします。やり手の適応度が c だけ下がって、受け手の適応度が b だけ上がっている。やり手が適応度を下げて受け手の適応度を上げていますから、これは利他行動なのですが、このときに、やり手と受け手の個体が確率 r で同じ遺伝子を共有していたとします。やり手の遺伝子が確率 r で受け手にもあったという場合には、やり手の適

応度は c だけ下がっていますが、受け手にも同じ遺伝子が確率 r であるのですから、受け手の利益が上がった分である b に確率 r を掛けた分だけ、やり手の適応度が上がります。ですから、 $-c$ に $r \times b$ を足したものが 0 よりも大きければ、つまり r が c/b よりも大きければ、この行動は自然淘汰において進化するわけです（図 2-1）。これが血縁淘汰理論です。

簡単に言ってしまうと、要するに、血縁同士だと利他行動は進化しやすいということです。なぜかということ、自分と同じ遺伝子を持っている可能性が非常に高いからです。自分の遺伝子を助けていることになるわけです。血縁間の利他行動というのはこれです。

問題なのは、非血縁、赤の他人の場合です。例えば、私と皆さん方の場合だと、同じところから来た遺伝子を持っている確率は 0 に近いですから、皆さんを助けても、同じ遺伝子を助けたことにはなりません。では、これをどう説明するかというと、互惠的利他行動という理論があります。

上は、やり手が損をして受け手を助けるという、先ほどの利他行動です。あるときにこういう利他行動があるのですが、別の機会に、受け手が b だけ損をしてやり手を助けて、やり手が c だけ得をすると、プラスマイナス 0 になります。どちらも損をしていない。どちらも困ったときに助けてもらっていますので、両方が得をするわけです。こういう条件があれば、赤の他人の間でも利他行動というのは進化する。要するに、相手から同じだけお返しがあれば、たとえ損をして相手を助けても、両方が得をするので、進化すると。まさにお互いさまです。お互いさまがうま

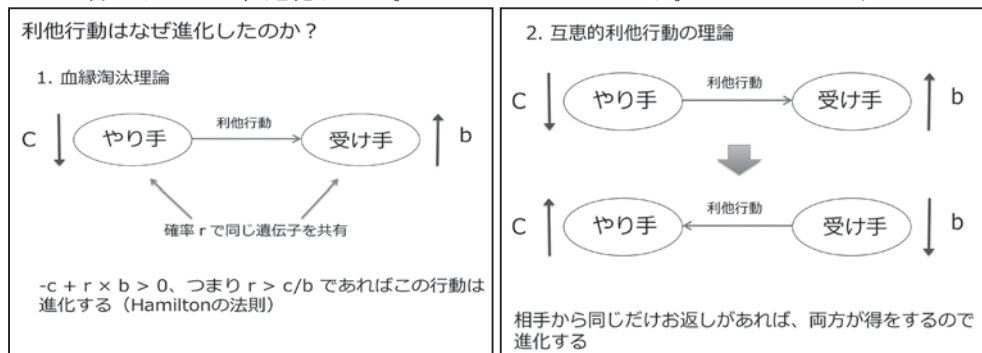


図 2-1

図 2-2

く働けば、赤の他人同士でも利他行動が進化するのではないかということです（図 2-2）。

これ（図 3）は私が大学生を対象に取ったデータなのですが、縦軸が、普段友人に対してどれぐらい利他行動をしているかを、尺度を使って点数にしたものです。横軸が、普段友人からどれぐらいソーシャル・サポートを受けているかを点数にしたものです。そうすると、比例します。要するに、友人から普段よく助けてもらっている人は、友人に対して利他行動をよくしている。ところが、あまり助けてもらっていない人は、やはりあまり利他行動をしていない。これはおそらく、その互惠的利他行動が現れたデータのひとつだということです。

ですから、ここまでのまとめですが、利他行動は、血縁淘汰理論と互惠的利他行動の理論の 2 つで大体説明できると思います。

そこで問題になるのが、では、なぜお返しが期待できない赤の他人に対して利他行動をするのだろうかということです。募金などがそうです。募金した相手から後で返ってくることは、誰も期待していないわけです。ところが、われわれは一生懸命募金をする。これはどうやって説明したらいいのかということになるわけですが、次に考えられたのは、間接互惠性の話です。これは何かというと、いわゆる「情けは人のためならず」で、

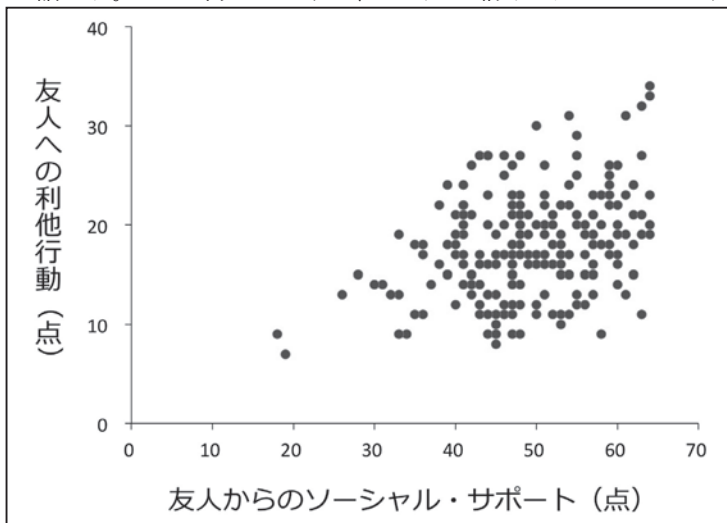


図 3

このことわざは皆さんご存じだと思いますが、要するに、人を助けると、廻り廻ってほかの人からお返しが来るということです。

人間の場合、助けた相手から直接お返しが来るのではなくて、社会の中を廻り廻って、ほかの人から返ってることがあるわけです。これを間接互惠性というのですが、そのときに重要になるのは、評判だといわれています。どういうことかという、要するに、人を助けると、周りの人がそれを見ていて、「こいつはいいやつだ」と思ってくれる。そうすると、周りの人から助けられる。だから、結局得をするのだということです。このように、うまく評判が廻ると間接互惠性が働いて、赤の他人の間でも利他行動が成り立つのではないかという説があります。

ただ、評判には2つあります。1つはよい評判です。助けたことによって、「こいつはいいやつだ」と思われる。もう1つは悪い評判です。助けなかったことによって、「こいつは駄目だ」と思われて、相手にされない。この2つがあるわけです。

では、われわれが人を助けるときに、どちらを期待しているのだろうかという問題があるのですが、ここでまた先ほどの独裁者ゲームが出てきます。先ほど説明したような独裁者ゲームをやるのですが、そのときに、実験室に目の絵や写真を置いておくと、相手に分配する額が増えます。

これは、実際に過去の研究で使われた目の絵やロボットの写真です。こういうものを提示して独裁者ゲームをしてもらうと、相手に分配する金額が、絵がないときよりも増えるのです。にわかに信じ難い結果なのですが、われわれもこれはちょっと信じ難いということで、大学生61名を対象に、先ほどの700円を用いた独裁者ゲームをやって、これを確かめてみました。

これ(図4)は実験風景です。こういう防音室の中に机があって、そこに700円を置いて、「相手に分ける分だけ封筒に入れてください」という形で分けてもらいます。机上に小さい鏡があるのですが、一方の条件では、この鏡に無地の布をかぶせる。別の条件では、目の絵が描かれた布をかぶせる。要するに、目の絵があるかどうかの違いだけです。これで分配額を比べてみると、統計的に意味のある差が出ました。目がな

いときよりも、あるときのほうが、分配額が増えます。

では、なぜ目の絵があると分配額が増えるのかということ、先ほど言われていた「評判」なのです。要するに、目の絵があることによって、評判を気にする心の仕組みが働く。だから、目の絵があると利他的になるのだという説明がされています。

ここまでは今までの研究で言われていたことなのですが、われわれは、その心の仕組みはどのように働いていくのかということをもう少し詳しく見ていきました。先ほども言ったように、評判には2つあって、1つはよい評判への期待です。何かいいことをすると、それを見てくれて、「こいつはいいやつだ」という評判が立つ。要するに、ポジティブな動機です。もう1つは、罰への恐れです。例えば、こういう分配の場面でケチなことをすると、「こいつはケチだ」と思われて、ネガティブな評判が立つ。この2つがあるわけですが、では、どちらなのだろうか。目の絵があることで、われわれはポジティブな動機が起こって分配するのか、それともネガティブな動機で分配していくのかを確かめようとしたわけです。

そこで、事後質問をしました。分配してもらった人に質問用紙を渡して、分配したときに何を考えていたかを答えてもらいます。例えば、「受け手



図 4

に対する分配額を決定するときに、以下のことをどのぐらい考えましたか」、あるいは「分配額を決定したときに、以下のことをどのぐらい気にしましたか」「この実験のお金のやりとりは、どのような状況に近いと思いますか」というような質問を17項目用意して、これにどれぐらい同意するかを7段階で答えてもらって、点数化しました。これで、何を考えていたかを探ろうというわけです。

ただ、この質問項目は、同じようなことを聞いているものがいくつかあります。ちょっと統計的な話になるのですが、そういったものを個別に分析してしまうと、統計的にいろいろまずいこともあるので、質問項目をまとめようということで、主成分分析を行います。要するに、先ほどの17項目をもう少し少数の同じような主成分にまとめられないか、ということを経験的に行うわけです。そうすると、5つの主成分が抽出されました。

注目したのは、そのうちの第一主成分と第四主成分です。第一主成分は、例えば「自分がいくら受け手に分配するか、誰かに試されている」とか、「周りの人の目を気にしなければならない状況」といったことと非常に相関が高かったわけです。おそらく、この第一主成分の得点が罰への恐れを示している。一方、第四主成分は、「受け手に多く分配することは、受け手のためだけでなく、自分のためにもなる」とか、「よい行いをすると、誰かが評価してくれる状況」と比較的関連がある。この第四主成分の得点というのは、おそらくよい評判への期待を示していると考えたわけです。

次に、これも専門的な話になりますが、媒介分析という方法を使いまして、分配者の考えが分配額の差に影響していたかどうかを経験的に調べました。この数字は、この2つの関連がどれぐらい強いのかという程度のものだと思ってほしいのですが、目の絵があると分配金額が増える。この間には関連があるわけです。ところが、目の絵があったからといって、第一主成分の得点が高くなったわけではないのです。さらに、第一主成分の得点が高かったからといって、分配金額が高くなったわけでもない。ということは、罰への恐れという動機は、この関係には全然関連してい

なかったということになります。罰への恐れが働いたから分配金額が増えたのではないということがいえます（図 5-1）。

ところが、第四主成分の得点、要するに評判への期待に関しては、目の絵があると評判への期待が上がる。さらに、評判への期待が上がると、分配金額が増えるという関係が出てきました（図 5-2）。要するに、われわれは、ネガティブな動機ではなくてポジティブな動機で目の絵に反応しているのだということです。

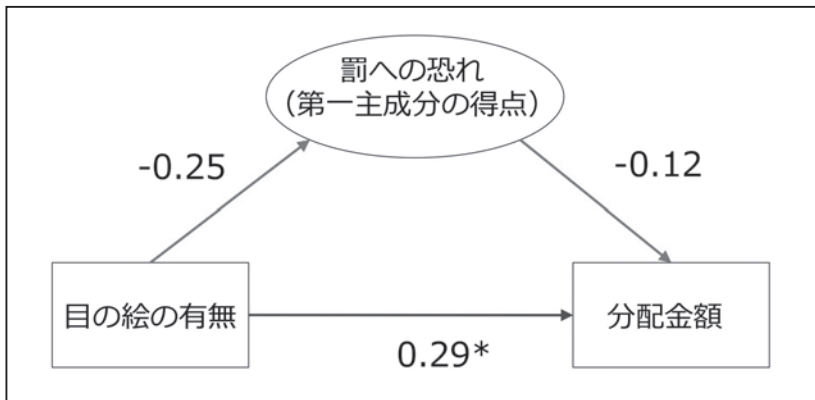


図 5-1

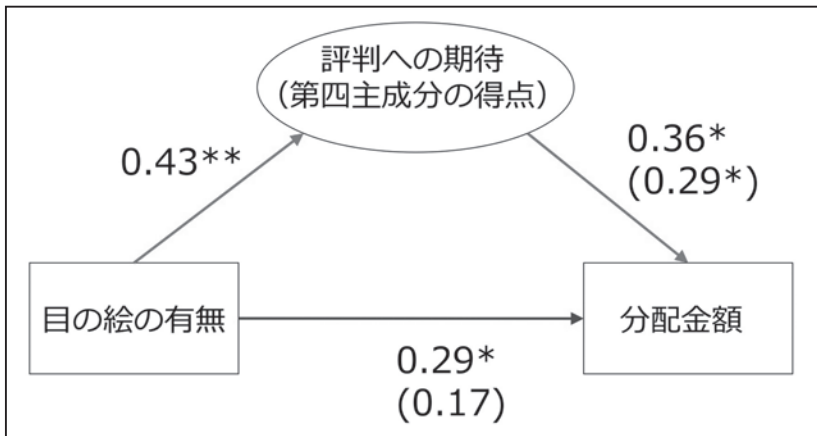


図 5-2

独裁者ゲームというのは、最初にも言ったように、誰に分配するかも分からないし、誰がその分配を見ているかも分からないので、その場面で多く分配したからといってどうなるというものでもありません。誰かが見ている状況ではないのですが、目の絵がそこにあると、われわれはこの独裁者ゲームの状況を、よい評判が得られる状況であるというようにポジティブに誤解するわけです。それで分配金額が増えたのではないかと考えています。

以上は分配者の側の話でしたが、今度は利他行動を受ける側の話です。互惠的利他行動の話をしました。互惠的利他行動が成り立つには、利益を受けるけれどもお返しをしない人が問題になります。互惠的利他行動は、お返しをするからこそ成り立っているのであって、人から助けてもらうのだけれども自分は助けないという人が出てくるわけです。なぜかという、そういう人のほうが得だからです。当然、お返しをしないので得になります。自然淘汰というのは適応度が高いほうが残っていきますから、どんどんお返しをしない人が増えていく。これをどう防ぐのかが大きな問題になります。

こういった裏切り行為には、実は2種類あります。1つは、明らかな裏切りと呼ばれているもので、裏切った人が全くお返しをしないという状況です。もう1つややこしいものとして、微妙な裏切りというのがあります。その裏切り者は、お返しをするけれど、相手よりも少なく返すのです。互惠的利他行動では、同じ量だけやりとりしなければいけないのですが、常に少なく返す。そうすると、明らかに裏切っているということとは分からないのですが、微妙に搾取されているという状況になります。

この微妙な裏切りは、分業が進むと問題になってきます。分業が進むと相手が何をやっているかはよく分かりませんから、そういう状況では、おそらく微妙な裏切りを防がないと互惠的な関係は保たれません。おそらく、人にはこういった微妙な裏切りに対する対抗策が進化しているのではないかというのが、われわれの仮説です。

この問題を解決するためにはどうすればいいかというと、最初から利他的な人と付き合えばいいわけです。要するに、自分に対して裏切りを

しない人と付き合えば、絶対裏切られる可能性はないですから、人というのは、利他的な人を検知しているのではないかと。利他的な人を見分けて、そういった人と選択的に付き合うということをしているのではないかと考えました。これをもう少しきちんと言うと、人間には、他者の利他的傾向を非言語的な手掛かり（身ぶりや表情）から推測し、それに対して適切な反応をすることができるのではないかと。そういった能力を進化によって得ているのではないかと考えました。

これも実験してみようということになりました。手順としては、まず、高利他主義者と低利他主義者を選出します。そして、その人たちが日常的に会話している様子を動画として撮影します。それを第三者に見てもらって、その動画を相手に、あるゲームをやってもらいます。その結果を分析するという流れになります。

まず、高利他主義者と低利他主義者の選出なのですが、うちの学部生 69 名(全て男性)に利他主義尺度というものをやってもらいます。これは、過去にした利他行動について、その頻度を答えてもらって、この得点でその人がどれくらい利他的かということを調べるというものです。得点が 90 パーセント以上を高利他主義者、10 パーセント以下を低利他主義者とします。要するに、上位 7 名と下位 7 名を、高利他主義者、低利他主義者として選り出すわけです。

この 14 名に「ちょっと実験室に来て協力してもらえませんか」と言うと、やはり高利他主義者は 6 名が協力してくれたのですが、低利他主義者は 7 名中 4 名しか協力してくれませんでした。この選出が非常に正しかったということを示しているのですが、そういうわけで、10 人の人たち（ターゲット）に実験室のスクリーンの前に座ってもらって、初対面の実験者と、「好きな食べ物は何ですか」といったたわいのない会話をしてもらいます。この横にカメラが置いてあって、首から上のアップを撮影します。

撮影自体は結構長い時間やったのですが、撮影開始から 30 秒間の映像を使いました。話している内容はみんな違うので、音声を消して、音は流れないけれども何か話しているという場面が見える。この動画を第三

者に見てもらって、「分配委任ゲーム」をやってもらいます。誰に見てもらったかという、全然別の大学の学部生 40 人です。

分配委任ゲームとは何かというと、まず実験参加者に 300 円を渡します。参加者の選択肢は 2 つあって、1 つは、相手に分配を委任する。この場合、相手は動画の人物なのですが、動画の人物が「この人に分配する」と言った額が与えられます。これは百円玉を使っていますから、0 円、100 円、200 円、300 円という単位になります。残りは相手の人が取るのですが、相手が「分配する」と言う金額がこの人に与えられます。もう 1 つ、分配を委任しないという選択肢があります。その場合は、確実に 100 円がもらえます。そういうゲームです。

ですから、参加者は、相手（動画の人物）が自分に 200 円以上くれると思えば分配を委任したほうがいいし、100 円以下しかくれないと思ったら、委任せずに確実に 100 円もらったほうがいいわけです。これによって、おそらく利他主義者とそうでない人の見極めをしているのではないかと考えたわけです。

先ほどの 10 名の動画を相手にした分配委任ゲームを行ったのですが、「動画の人物は、最初に 300 円与えられたら、相手にどれくらい分けるかを聞かれています。その 10 人の動画が流れるので、あなたは 300 円の分配を委任するかどうかを決めてください」という説明をします。

実際のシチュエーションはこうなっています。PC があって、参加者がいて、実際に現ナマの 300 円が目の前に出ています。そして、「自分」と書いた封筒と、「委任しない」と書いた箱があるのですが、動画の人物に分配を委任するのなら、その人物の番号を書いた封筒に 300 円を入れます。委任しないと決めたら、「自分」と書かれた封筒に 100 円入れて、残りの 200 円を「委任しない」という箱に入れます。これを、10 人の相手について繰り返します。

300 円の分配を委任されたターゲットには 1 点を与えて、委任されなかったターゲットには 0 点を与えます。この得点を見ることによって、高利他主義者 6 名と低利他主義者 4 名がどれくらい分配を委任されたかということを調べてみると、やはり、高利他主義者のほうが低利他主義

者よりもよく委任されるという結果になりました。

つまり、参加者は、音声のない 30 秒間の動画を見ただけで、高利他主義者を低利他主義者よりも信頼したということが言えるわけです。単に利他主義者かどうかを見分けただけではなく、ちゃんと信頼してお金の分配を委任するという行動を示しています。

ですから、われわれは、相手の表情や身ぶりといったことによって、その相手がどれぐらい利他的かということはある程度見分けることができるのではないかと考えています。これはおそらく、微妙な裏切りに対抗するための、自然淘汰によって備わった能力なのではないかと考えています。

ここまでが、現代人に備わった、利他行動に適応したいろいろな認知的な能力の話なのですが、では、われわれ現代人の利他性はどこから来たのか。ここからちょっと別の話になりますが、進化について考えてみます。

皆さんがどのぐらい人類進化のことをご存じか知りませんが、今のところ、最古の人類だといわれているのがサヘラントロプス・チャデンシスです。アフリカのチャドで発見された化石なのですが、これが大体 600 万年～700 万年前ぐらいの間です。ヒトとチンパンジーが別れたのが 600 万年～700 万年前の間ですから、共通祖先から分かれて間もない人類がこれです。共通の祖先が 600 万年～700 万年前ぐらいで、一方の系統は現代人になって、もう一方の系統は現在のチンパンジーになりました。ということは、チンパンジーの利他性がどれぐらいあるかを調べることによって、共通祖先にどれぐらい利他性があったかということはある程度推測することができるわけです。

ここからは知り合いの京都大学の山本真也君がやった実験のお話です。では、チンパンジーはどのぐらい利他的なのかというと、山本君の研究では、まとめて言うと、相手が困っているのを自発的には助けない。ただ、相手から助けてくれと要求されると、それには応じる。では、相手が困っていることが分からないのかというと、そうではないらしいです。状況を見ると、ある程度困っているということが分かるのですが、自発的に助けるということはしないということが、実験によって分かっています。

山本君がやった実験（図6）はどのようなものかという、実験ブースが2つあって、チンパンジーがいます。一方のチンパンジーのブースにはストローが置かれていて、もう一方にはステッキが置かれている。チンパンジーはジュースが好きなのですが、こちらのジュースは遠くにあってステッキがないと取れない。こちらのジュースは近くにあるけれども、ストローがないと吸えない。要するに、お互い必要なものが相手のブースにあるという状況です。ブースの間には穴が開いていて、やりとりはできます。

人間だったら、お互いを見て、この人はステッキがない、困っているなと思って、「はい、ステッキ」と渡すのですが、チンパンジーは絶対そうすることはしません。こちらのチンパンジーがステッキを要求するまでは、絶対に渡さないわけです。ですから、ヒトというのは、いわば「おせっかいなサル」なのです。サルの中でも非常におせっかいで、困っている人がいると、その困っている状況を見て助けてしまう生き物です。おそらくそれは、チンパンジーと分かれた後で進化したのだと言えるわけです。

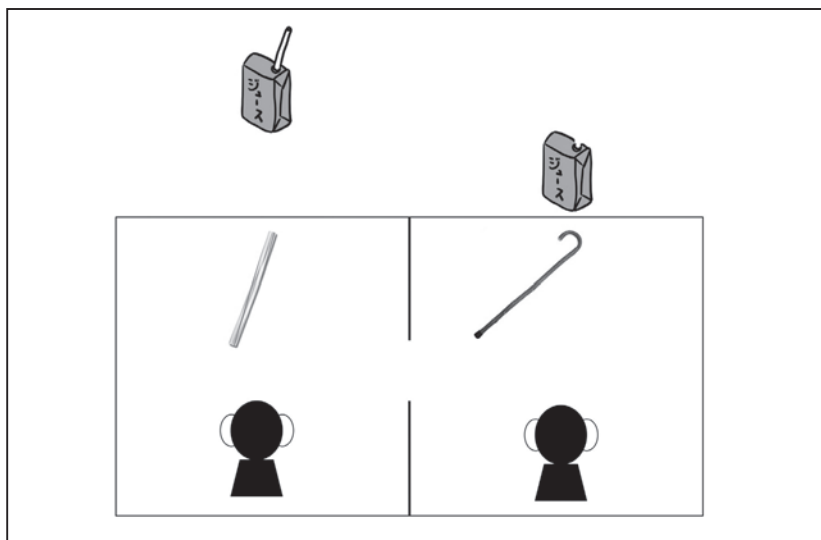


図 6

最後の話題として、倫理に関係した話をしたいと思います。おそらくこの次の児玉さんの話にもつながると思います。

このように、われわれは行動の進化ということを考えているのですが、ではヒトの倫理はどうやってもたらされたのかという研究が最近いろいろ進んでおりまして、大きく分けて2つの仮説があります。1つは、今までの話のような、利他行動に適応したいろいろな心理的基盤があつて、それが発展した形で倫理というものが生まれたという仮説と、それから、利他行動の心理的基盤と倫理は全く別物であつて、場合によっては拮抗するのだという、2つの考え方があります。

これも他人の研究の紹介なのですが、最近、非常に面白い論文が発表されたので紹介したいと思います。Kurzban という人の研究⁽¹⁾です。先ほど血縁淘汰理論の話をしました。血縁淘汰理論は、血縁度、要するに遺伝子を共有している確率がどれくらい高いかによって行動が決まるのですから、非常に功利主義的なものです。そういったものとカント流の義務論とが一体どう関係しているのかということ調べた研究です。そこで使ったのが「トロッコ問題」です。皆さん、たぶんトロッコ問題はご存じだと思うのですが、これを応用した質問紙によって検証しました。

トロッコ問題とは、トロッコが暴走していて、そのままだと5人の人間が死んでしまう。新たなポイントを設けて、このポイントを切り替えると、トロッコはそちらへ行つて、5人は助かるけれども、1人が死んでしまう。どうしますか、という問題（ポイント操作バージョン）と、もう1つは、ポイントを切り替えるのではなくて、1人の人を突き落とす。そうすると、この人は死んでしまうけれども、5人は助かる。ここで突き落とさないのか、どうするのかという問題（突き落としバージョン）です。

Kurzban は、対象を、自分にとって赤の他人、友人、きょうだいというようにそれぞれ設定して、トロッコ問題に答えてもらいました。突き落

(1) Kurzban, R., DeScioli, P. & Fein, D. (2012) Hamilton vs. Kant: pitting adaptations for altruism against adaptations for moral judgment. *Evolution and Human Behavior*, 33, 323-333.

としバージョンとポイント操作バージョンの2つの質問をしたのですが、対象を変えると結構答えが違って、犠牲者「轢かれそうになっている人と、その人を救おうとすると犠牲になる人の両方」を他人にした場合よりも、

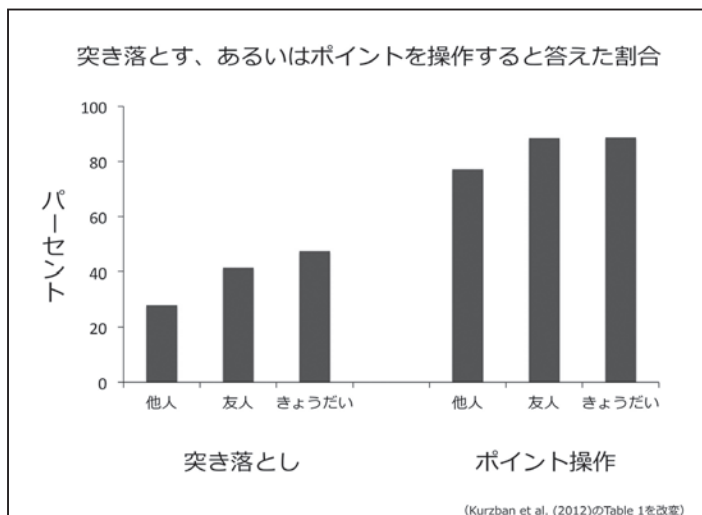


図 7-1

友人やきょうだいにした場合の方が、突き落とすという人が増え、ポイント操作をするという人も微妙ですがそれでも増えるわけです（図 7-1）。

どういうことかということ、相手が友人やきょうだいの場合の方が、より功利的に振る舞っている。突き落とすやポイント操作をする方が1人を犠牲にして5人を救うわけですから、他人よりも血縁相手の場合に、より功利的に判断しているということになります。ただ、ではどれぐらい悪いことだと思いますかと聞くと、差はありません（図 7-2）。みんな悪いことだと思う程度は同じなのですが、実際の選択はこうなるわけです。

もっと面白いのは、突き落としバージョンで、突き落としたことによって救われる人と突き落とされる人の関係を変えてみたときです。例えば、救われる人はあなたにとって友人で、突き落とされる人は他人、救われる人はきょうだいで、突き落とされる人は友人、救われる人はきょうだいで、突き落とされる人は他人というように関係を変えて、調べてみま

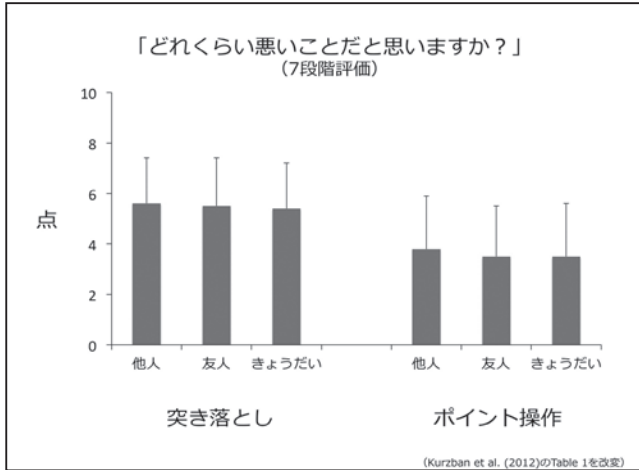


図 7-2

した。

これ（図 7-3）が「突き落とす」と答えた人の割合なのですが、面白いのは、他人を 1 人突き落として、きょうだい 5 人が救われる場合です。これは、先ほどの血縁淘汰理論から考えると、100%突き落とすべきなのです。きょうだいとは遺伝子を共有しているわけですから、きょうだ

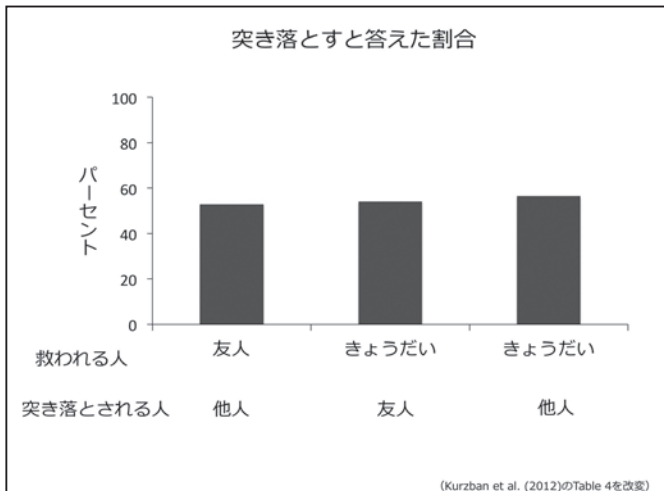


図 7-3

いを5人救うためなら、他人を1人突き落とすのは、血縁淘汰理論からいくと当たり前なのですが、「突き落とす」と答える人は半分しかありません。私のような生物学者から見ると、非常に興味深いというか、面白い結果です。

ここから Kurzban らが結論付けたのは、仮説2の方が正しいのではないかということです。血縁淘汰理論や互惠的利他行動の理論をベースにして利他行動が成り立っているのですが、そこから倫理が生まれたのではなく、ヒトの倫理というのはそれとは別物であって、場合によっては拮抗するようなものではないかと言っています。

ただ、これもまだ研究が始まったばかりで、よく分かりません。私も最近こういう問題に興味を持っていたり、これからいろいろやってみようと思っていますが、倫理の問題というのは、おそらくこういった進化的な視点から、まだこれから大いに語られていくと思います。

まとめとしては、ヒトの利他行動で非常に大きな特徴が赤の他人に対する利他行動なのですが、それを維持するための、例えば目の絵があったら利他性が高まったり、外見だけである程度他人の利他性を見分けたりといったさまざまな認知的な基盤が、進化によって備わっている。それから、こういった認知的な基盤と、ヒトが持っている倫理あるいは倫理性といったものとの関係が、おそらくこれから非常に面白いテーマになると、私は思っています。

以上です。どうもありがとうございました。

【司会】 小田さんの報告に対して、確認の質問を受け付けます。

【参加者A】 最初の独裁者ゲームのときに、何と言ってお金を渡すのでしょうか。渡し方を教えていただきたいと思います。相手の人と分けなさいよと言って渡すのでしょうか。

【小田】 この場合は忘れたのですが、ほかの参加者と分け合ってくださいという感じのようです。確かにそれによって変わってくるというのは、結構ありますね。■

津波てんでんこと 災害状況における倫理



児玉 聡

児玉と申します。どうぞよろしくお願いします。小田さんのお話が面白かったので、途中からずっと夢中で聞いておりました。私の発表はどのぐらい面白いかわからないのですが、お付き合いいただければと思います。

では、始めたいと思います。概要を申し上げますと、「津波てんでんこ」とは何かという話を致します。心理学の先生がいらっしやるところで心理の話をするのも気が引けるのですが、「津波てんでんこ」のお話をした後に、「津波てんでんこ」に対する2つの批判があるという話をしま

す。1つは、「津波てんでんこ」とは非常に利己的なものなのではないかという話があります。それについてお話したいと思います。もう1つは、今のお話とも関係すると思うのですが、「津波てんでんこ」に従うことは人間の心理として無理なのではないか。今、利他心の話がありましたが、われわれが持っている利他心、特に家族に対して持つ強い心情のことを考えると、「津波てんでんこ」というのは、人間が従うルールとしては無理があるのではないか、という批判です。それについてちょっとお話ししてみたいと思います。

まず、「津波てんでんこ」とは何かというお話です。震災が起きてから新聞をずっと見ていたのですが、哲学あるいは倫理学をやっている身としては何もできないなと思いつつ、1つ非常に関心を持った話がありました。それが「釜石の奇跡」と呼ばれるものです。

釜石市というのは人口4万人ぐらいのところですが、地震と津波によって文字どおり市が破壊されて、1,200名の死者・行方不明者が出たといわれています。ただ、いろいろなところで人が死んだわけですが、釜石市の小中学生に関しては、約2,900名がほぼ全員生き残りました。これは運によるものではなかったということが、いろいろなところで指摘されております。ところで、「津波てんでんこ」というのを聞きになったことがある方はどれぐらいいらっしゃいますか。逆に、初めて聞かれるという方は、いらっしゃいますか。ああ、ありがとうございます。

これは去年の3月の末ぐらいに出た新聞なのですが、その後も時々出ていて、特に毎日新聞が、今回の震災の前からこの話をずっとしておりました。どのような話かと言いますと、「津波てんでんこ」というのは、われわれが従うルールの一つということになります。「津波が来たときには、家族や他人のことは気にせず、高台に逃げよ」というルールです。

「てんでんこ」というのは、「てんでばらばらに」を意味する方言だと言われています。「てんでんこ」という言葉は昔からあったようですが、「津波てんでんこ」という言葉は、この震災より前ですけれども、わりと最近にできた言葉で、日本の津波災害史の研究者である山下文男さんがつくったと言われています。『津波てんでんこ——近代日本の津波史』など、

いろいろな本を書かれている方で、今回、ご自身も被災されて、そのときには助かり津波の恐ろしさを言っておられたのですが、2011 年の 12 月にお亡くなりになりました。

例えば、こんな記事があります。ちょっと読んでみたいと思います。

この地に伝わる「てんでんこ」という方言がある。「てんでばらばらに」という意味だが、もう一つ、津波の際には何をおいても一目散に逃げる、という教訓を伝える言葉でもある。この「津波てんでんこ」を広めたのは、岩手県大船渡市出身で津波災害史研究者の山本文男さんだ。その著書などによると、3,000 人近い死者を出した昭和の三陸津波で、山下さんの父は小 3 の山下さんらを置いて逃げたという。(毎日新聞 2011.04.19)

お父さんが山下さんを置いて逃げたということについて、また後で心理学の方から、どういう心理かをご説明していただけるかもしれません。

「子どもの手も引かずに自分だけ逃げて」とからかう母に、父は「津波のときはてんでんこだ」と照れ笑いだ。父は死者 2 万人を超えた明治の三陸津波で、乳飲み子の妹を抱えた母（山下さんの祖母）を亡くしている。山下さんは、「共倒れを防ぐための心掛け」として、あえてこの経験を説いて回ったのだ。(同上)

津波で、共倒れという現象がたくさんある。これを避けるために、「津波てんでんこ」ということで、てんでばらばらに逃げるというルールにみんなが従うべきだと、この人は言っていたわけです。

共倒れという話は切りがないぐらいにたくさん出ておりまして、1 つだけ見てみたいと思います。

中 3 ～小 1 の 4 人の子を持つ阿部利美さんが校庭に着いたのは午後 2 時 55 分ごろ。ほかにも次々と迎えが来た。釜小は地震や台風のとき、

児童の安全確保のため保護者に引き渡すルールを決め、定着している。
(毎日新聞 2011.08.12)

ここで気を付けてほしいのですが、この小学校では「津波てんでんこ」とは別のルールを採用していたということです。地震が起きたときにどういうルールにするかというのは、倫理学というか、規範を考える上で非常に重要なのですが、地震や台風のときは、児童の安全確保のために、てんでに逃げるのではなくて、保護者がその子どもを受け取るというルールを決め、定着している、と。「担任は児童の人数を確認し、阿部さんと5年生の次女の手をつながせた」。これでたくさんの方が亡くなったといわれています。

引き渡し後に犠牲になった児童は、(この小学校だけでも) 死亡・不明25人のうち22人。家族と一緒に亡くなったケースが多く、少なくとも4家族は全員が死亡した。8人全てが亡くなった家族もある。(同上)

「三浦さんは津波が来る前、自宅にいた妻の携帯電話と2回つながり、『逃げろ』と伝えた。」スライド上の新聞記事は途中カットしてあるので三浦さんは出てこないのですが、「なぜ逃げなかったのか。『家族みんな、優奈が学校から帰って来るのを待っていたんだ』と思う」と書いてあります。家でみんなの安全を確認してから逃げようとしたということです。これはうまくいかなかった例になります。

保護者に引き渡すのと似たようなもう1つのルールとして、集団避難も、いくつかの、特に高齢者が多い地域で行われていたようです。

地震が発生してから津波が市街地に流れ込むまで約37分間あり、このときの行動が生死を分けた。同市高田町に住んでいた山口晃司さんの地元では、災害発生時、住民がいったん『森の前会館』に集合し、点呼をとる手順になっていた。(毎日新聞地方版／岩手 2011.04.25)

これもやはり、「津波てんでんこ」とはまた違った、集団避難というルールを採用しているわけです。しかし、「町内会長が津波にのめれたと聞いた。真面目に点呼をとって次の行動に備えていたと思う。」と。これも非常にたくさんの人が亡くなった例として挙げられると思います。

古くから「津波てんでんこ」と語り継がれる三陸地方だが、住民の高齢化が進むにつれ、災害時の集団避難が各地域でルール化したとみられる。陸前高田市によると、市内116町内会の8割以上が自主防災組織を作り、特に沿岸部は全町内会が結成していた。

今回被災した住民からは、「やはり津波てんでんこは正しかった」との声も聞かれるが、佐藤さんたちと気仙成田山に避難した熊谷和子さんは言う。「一人で逃げられない人を取り残すわけにはいかない。集団行動が間違っていたとは思えない。」(同上)

他人を助けるというのが非常に重要だから、一人で逃げるわけにはいかないだろうというわけです。ただ、「津波てんでんこ」を支持する側から言いますと、これは共倒れになってしまっている、典型的な共倒れのルールだから、コミュニティセンターみたいなところに集まらずに、それぞればらばらに逃げておくべきだったのではないかと考えられるわけです。このような共倒れを防ぎ、一人でも多くの人を助けるためのルールが、「津波てんでんこ」だということです。

「津波てんでんこ」の話は去年の3月末ぐらいの新聞で出てきたのではないかと思います。その後いろいろなところで言われるようになって、これは非常にいいのではないかという評価が出てきました。防災教育としてしっかりやっていたからこそ、たくさんの人が助かったのだということで、たとえば文科省も全国の小中学生に対する防災教育の一環として「津波てんでんこ」を教える計画だということが報道されていました。実際、今どこまで進んでいるのか分からないのですが、もしどなたかご存じでしたら、また教えてください。

しかし、上でも既に少し批判的なコメントを紹介しましたが、この考え方には少なくとも2つの批判があると考えられます。その2つの批判を紹介して、それに対してこのように考えられるのではないかという私の意見を述べたいと思います。

1つ目の批判は、先ほど申しましたように、「津波てんでんこ」は利己的な教えであると。自分さえ助かれればいいという考え方なのではないかというわけです。

岩手県のある市長がこのように言っております。例えば「寝たきりのおばあちゃんがいても、自分を守るために逃げろと子どもたちに教えるのは、果たしてどうか」。こんな教育を子どもにするというのは、子どもがもつ利他心を破壊してしまうことになってしまうのではないか。ここはまた後で心理学の先生にお尋ねしたいのですが、こんなことをやるべきではないのではないかというわけです。

「津波てんでんこ」は、毎日新聞がやたらと取り上げていまして、「津波てんでんこ」は無理だとか駄目だという論調が多いように思いました。ただ、途中から論調を変える人もいたようですが、「津波てんでんこ」に関心があれば、毎日新聞のデータベースをご覧になることをお勧めします。

例えば、半年後ぐらいに書かれた記事ですが、「記者の目：『津波てんでんこ』の教訓」でこのように書かれています。

東日本大震災が起きた3月、私は科学環境部で地震関係の記事を担当していた。かつてない規模の地震と津波に驚愕しながらも、警察官や消防団員など、責任感から職務を全うしようとした多くの人が逃げ遅れて、津波の犠牲になったことに心が痛む。一方で、三陸地方には、「責任感」とはまるで正反対のような「津波てんでんこ」という教訓が伝わる。これをどう理解すればいいのか。(毎日新聞 2011.09.23)

というわけです。これについて、後で、私の意見を述べてみたいと思います。

もう1つの批判をご紹介します。もう1つの批判は、「この教えに

従うことは、自分の大切な家族や隣人の命が関わっているときには心理的に困難であるか、事実上無理。人間としてこんなルールには従えない」というものです。こんな法律なり倫理なりのルールをつくったとしても、人間はこういうものには従えないのではないか。特に、自分の身内がいるときにはとてもできない、心理的に困難だ、というような批判です。

例えば、これも新聞記事ですが、岩手県のボランティアの消防団員の方がこのように言っていました。この人は、8人ぐらいの消防団員で1人のおばあちゃんを助けようとしていたら波にのまれて、そのうちの多くの方が亡くなったという、そのときに生き残った方です。

人間、助けてけろって頼まれたら絶対行く。「てんでんこ」はできないって、今回よく分かった。(毎日新聞 2011.07.03)

ある東大教授は、このように書いています。

津波てんでんこは（他人を思いやる）本来の人間性に反し、簡単には取れない行動だから（こそ）、あえて伝えられてきたのではないか。(毎日新聞 2011.09.23)

つまり、「津波てんでんこ」というのは、われわれの利他的な、あるいは特に大切な人を命を懸けて救おうとするような心、人間の本性に反しているのではないかというわけです。

今言ったようなことは、新聞記事でも批判されています。ですから、もう一回繰り返しますが、2つ批判がある。それぞれ区別するのは難しいかもしれませんが、1つ目は、「津波てんでんこ」は利己的である」ということです。利己的だから、それは倫理的でない。利己的な教えだから、それは学校の道德教育なり学校の教育で教えるようなことではないと。

もう1つは、「津波てんでんこ」は、たくさんの人を助けるためには、非常にいいルールかもしれない。ただ、われわれ人間の本性、人間の心理には反しているので、たとえ教えたとしても従えないだろう」という

批判です。繰り返しますが、1つ目は「倫理に反する」という言い方で、もう1つは、むしろ「人間の心理に反する」というわけです。

次に、では「津波てんでんこ」は利己的な教えかということですが、私はそうではないと思います。最近、カントの立場から「津波てんでんこ」を正当化しようとしている人もいます。今回は扱わないのですが、いろいろな人が言っています。「津波てんでんこ」自体は倫理的に正当化できるのではないかという人が多いのではないかと思います。私もそう思います。必ずしも利己的ではない。私は功利主義を支持しているので、「津波てんでんこ」は、たくさんの人を助ける、「最大多数の最大幸福」という功利主義の発想に非常になった発想ではないかと思います。

「津波てんでんこ」は、可能な限り多くの人命を救うという功利主義的なルールである。逆に、われわれがいつも言う、「親切にするべきだ」「困った人を助けなさい」という一見倫理的な教えは、この特殊な状況下では救われる命を最大化できない。普通に利他心の発露として他人を助けようとするような行動を取ると、かえって結果が悪くなるというわけです。突飛と思われるかもしれませんが、今言ったことを囚人のジレンマ状況と対比して考えてみたいと思います。

囚人のジレンマ状況について、ごく簡単にご説明します。ある犯罪の2人の容疑者がいる。取りあえず何か犯罪を1件、犯しているのですね。それで、余罪を問われている連中なのですが、2人容疑者がいて、別々

囚人のジレンマ状況：ある犯罪の二人の容疑者が別々の取り調べ室にいて、「自白すれば減刑される」という選択肢か「自白せずに刑期を過ごす」という選択肢かを選ばされる

	Aが黙秘する	Aが自白する
Bが黙秘する	二人とも懲役3年	Aは懲役1年 Bは懲役15年
Bが自白する	Aは懲役15年 Bは懲役1年	二人とも懲役10年

図 1 囚人のジレンマ状況

の取調室にいる。彼らは、それぞれの部屋で、自白すれば減刑されるという選択肢か、自白せずに刑期を過ごすという選択肢かを選ばされる。そういう状況にあります。(図1)

AさんとBさんがいて、両方とも犯罪は犯しているのですが、もう1件余罪を問われていて、自白するかどうかを別々の部屋で問われている。自白すると減刑されて、自白しないと刑期を過ごすことになる。それぞれ警察との取引があつて、Aが黙秘してBも黙秘すると、2人とも懲役3年になる。合わせて6年なので、AとBを合わせたときには一番いい。ただ、囚人のジレンマでよく知られているのですが、それぞれが一番自分にとって合理的な行動をしようとするともみんなが損をしてしまうということで、Bが自白してAが黙秘すると、Aは懲役15年で、Bは懲役1年になる。逆に、Aが自白してBが黙秘すると、Aは懲役1年で、Bは懲役15年になる。自白したほうが得になるわけです。

そうすると、本当は2人とも黙秘することが、1人3年ずつで合計6年、お互いにとっては一番いいのですが、2人とも自分の利益を追求しようとする、2人とも懲役10年になってしまい、合わせて20年。一番望まない結果になってしまいます。これを先ほどの津波でんでんこの話と結び付けてみますと、共倒れという状況が起きてしまうわけです。(図2)

同じようにして津波のジレンマ状況について考えてみます。もし2人

もし二人の家族が離れたところにいてお互いを探すことに決めたとなると、二人とも津波で死ぬ可能性がある。しかし、二人が自分だけで逃げることに決めたとなると、二人とも助かる可能性が高くなる

	AがBを探さず一人で逃げる	AがBを探す
BがAを探さず一人で逃げる	二人とも助かる可能性	Bは助かるがAは死ぬ可能性
BがAを探す	Aは助かるがBは死ぬ可能性	二人とも死ぬ可能性(共倒れ)

図2 津波のジレンマ状況

の家族が離れたところにおいて、お互いを探すことに決めたとします。相手がどこにいるか分からない、家か学校にいますので探しに行こうと決めたとすると、2人とも津波で死ぬ可能性がある。しかし、2人が自分だけ逃げることに決めたとすると、2人とも助かる可能性が高くなる。これは似たような構造があるのではないかと思います。これはお母さんでも、子どもでも、お父さんでも何でもいいのですが、AがBを探さず1人で逃げて、BもAを探さず1人で逃げる。お互いに助け合わずに逃げると、2人とも助かる可能性がある。功利主義的には、2人が助かるというのが一番いい結果です。

でも、AがBを探すけれども、BがAを探さずに逃げると、Bは助かるけれどもAは死ぬ可能性が高くなる。逆でも同様のことが起きる。一番望まないのは、AもBもお互いを探して、2人とも死ぬ可能性が高くなるということです。これが、山下さんが言っていた共倒れという状況だと思うのですが、まさに利他心の発露で、お互いのことを案じて助けに行くと、2人とも死んでしまうことになり得るというわけです。

そういうことで、功利主義的には、それぞれが相手のことを助けに行かずに、自分だけ高台へ逃げるとというのが望ましいと思うのです。ですから、「津波てんでんこ」というのは、この事例を考えると、利己心からやる人もいるとは思いますが、利己心といわずに相手のことを慮っても、これが正しいという可能性がある。必ずしも利己的とは限らない。共倒れを避けるために行動している可能性があるということが考えられるわけです。お互いを裏切っているのではなく、協力し合っているのだと。

ですので、もう多くの人は「津波てんでんこ」は利己的ではないと思っています。とはいえ、初めは利己的だということがよく言われていたので、もう一度あえて言うておきますが、「利己的とは限らない」。もちろん、利己的に、自分のことだけを考えてわれ先にと逃げることはできるのですが、そうでない人でもこれに従うのが、たくさんの生命を救えるという意味では正しいということがあり得ると思います。

先ほど小田さんのお話を聴きながら考えていました。間接互惠性という話がありましたが、「間接」というのは非常に使い勝手のいい言葉で、

「津波てんでんこ」も、利他心そのものから、つまり、本当に助けなければ死んでしまうからすぐ行かなければいけないというような、相手のことを思いやる心から直接に行動するのではなくて、思いやるからこそ別の行動を取る。そういうことは、ありますよね。私たちがどうやって幸せになるかというときに、あまり幸せについて考えないほうが良いという話が、幸福のパラドックスという話ですが、何をしたら幸せになれるかということをつも考えているよりは、むしろ幸せについて考えずに、野球をしたり、野球を見たり、あることに夢中になっていたほうが良い。野球をしながら、今自分は幸せだろうかなどと考えていると、かえって幸せが損なわれてしまう。それと似たような意味で、「津波てんでんこ」も間接的な利他主義だと考えられると思います。

つまり、利他心の発露というか利他心そのもの、あるいは、利他心という言葉がよくなければ同情とか、共感とか、そういった感情そのものに従って行動するのではなくて、あえてそれを抑えて行動することで、相手も助かるし、自分も助かることができるというわけです。

ただ、これが成功するにはかなりの教育が必要で、「津波てんでんこ」がうまくいくには、一方が他方を探しているという疑いがなくなるよう、信頼関係を築く必要がある。これはほかの人によっても強調されているところです。まさに釜石市の小中学校でもそのような教育がなされていました。

どのように教えられていたかは、いろいろなところで紹介されています。子どもたちに対しては、「僕たちは絶対に逃げる。だから、お母さんも逃げて」とお母さんに言うように、学校で伝えられていました。お母さんが子どもを心配するかもしれないけれども、助けに来るなと、子どもから親に言え、というわけです。生徒たちの親も、学校の先生から、子どもが自分で必ず逃げることを確信するまで、子どもとよく議論するように伝えられていました。絶対に自分を探しに来たりしないし、親を待っていたりはしないということが確信できるまで、よく議論することです。ですから、地震が起きれば津波が来る。津波が来ると予想されたら、もうすぐに逃げる。待つということをしないというわけです。

これがうまくいっていなければ、「津波てんでんこ」の目的である、一番たくさんの人を助けるということはいきません。自分が逃げても、相手は自分のことを待っているという状況だと、多くの人は救えないわけです。ですから、教育が重要だということがいろいろなところで述べられています。

今のところのお話をまとめますと、津波てんでんこは利己的な教えかということ、そうではないだろうと思います。われわれとして何をすべきかということ、津波が起こったらどうするかということを考えるのではなくて、ある意味では条件反射的にこれに従って行動できるように、このルールを自分たちの中で内面化する。それだけではなく、ほかの人たちが同じ教えに従って行動することを確信できるよう、みんなの間に信頼関係を築く必要があると考えられます。自分だけこれに従うということではなくて、みんなの間でこのルールを共有する。そうでないと意味をなさないように思います。

次は、「津波てんでんこ」と人間心理についてです。繰り返しになるのですが、このような教えに従うことは心理的に困難だと。今、話を聞いて、「たくさんの人が救える、教育で信頼関係が培われればできる」と言っていたけれども、こんなことには従えない。われわれにとっては無理だろう」という方がいるかもしれません。実際、私も、例えば自分だったらどうするかと考えると、簡単にこういう指摘に対して答えることは難しいと思うのですが、後でディスカッションもありますので、あえて一つの方向性として論じてみたいと思います。

倫理学とか生命倫理と言われる領域では、救命原則というルールが知られています。これは、規範的というのではなくて、むしろ記述というか、われわれの心理としてこういうルールをわれわれが守っているだろうというようなものです。例えば、つい最近も、神奈川で、ホームに転落した高校生の女の子を2人の人が助けに行ったという話がありました。新聞を見ていても時々ありますが、危機に瀕した人を、自分の命を顧みずに助けるときもある。自分の命を懸けるかどうかは必ずしも明確ではないかもしれませんが、われわれは、死にそうな人に対してはいかなる

犠牲を払ってでも助けるべきだと、常にやるわけではないけれども、考えている。

いかなる犠牲でも払うべきだというのは、功利主義的には支持できなくて、功利主義では「最大多数の最大幸福」を考えるわけですが、何人死んでもとにかく助けるべきかという、そうではないと功利主義者は言うと思います。犠牲もしっかり考えなくてはいけないと思うのですが、ただ、人々の中には、そのような計算を度外視する心持ちが多かれ少なかれあるのではないかと思います。

ですから、たくさんの人を助けよう、たくさんの人を幸福にしようという功利主義的な思考に対して、義務論的な思考、やはりやってはいけないことがあるだろうとか、いかなる犠牲を払っても助けなければいけないとか、そういうときがあるだろうとわれわれは考えているというわけです。

そうすると、たくさんの人を救うとか、いくら頭の中で「津波てんでんこ」によって多くの人助けられると言っても、できないときがあるのではないかと。自分の命と引き換えにしてでも助けに行った方がいいのではないかと考えるときがあるのではないかと考えられるのですが、「津波てんでんこ」のことを考えたときに、それが一体どんな状況なのか、それぞれの人が置かれている状況を少し考える必要があるのではないかと思います。

もっとたくさんに分けられるかもしれませんが、3つの状況に分けてみました。1つ目の状況としては、自分の大切な人が安全かどうか分からないけれども、彼らが自分たちで避難できると知っている場合です。先ほどの、お母さんと小学校にいる子どものような場合ですね。釜石市の例でも見たように、これは「津波てんでんこ」が最もよく機能するような状況ではないかと思います。ただ、先ほど申しましたように、事前に十分な教育がなされていないと、「津波てんでんこ」のルールが持つ目的が達成できないだろうと思います。

2つ目は、自分の大切な人が安全かどうか分からず、しかも彼らが自分たちで避難できないことを知っている場合です。家に寝たきりの人が

いるかもしれない。あるいは、家に小さい子がいるかもしれない。自分では高台に行けないということが分かっているような場合があるかもしれないということです。

これについては、特に心理的に1つ目より困難だと思います。「津波でんでんこ」に従うと、大切な人を置き去りにする可能性がある。しかし、そういう状況では、いろいろなことが不確かである。本当に家にいるのかどうか、あるいは誰かが既に助けに行っていないかどうかということが、分からない。誰かが既に彼らの避難を手伝ってくれたかもしれない。それなのに自分がそこに行くと、「津波でんでんこ」の持っている目的が達成されなくなるわけです。

ですから、簡単に結論だけを言うことになってしまいますが、2つ目の状況において「津波でんでんこ」に従うことは、より心理的には困難であるかもしれないけれども、やはり正しい選択なのではないかと思います。それでも、やはり「津波でんでんこ」のルールというのは全員が従ったほうがいいのではないかと、私は思います。

3つ目の状況は、より心理的に困難だと思うのですが、自分の大切な人が安全でないことを知っていて、しかも彼らが自分で避難できないことを知っている場合です。例えば、崖の下に子どもなり動けない人がいることが分かっている状況ですね。そうすると、先ほどの消防団員の人が「人間、『助けてけろ』と頼まれたら、絶対にてんでんこはできないと、今回よく分かった」と言っていたように、助けに行かなくてはということが非常に思われる場合だと思います。

正直、これに関してどうするかというのは非常に難しいし、私もはっきりよく分からないところがあるのですが、次のように考えております。自分が消防隊員や警察官の場合、「津波でんでんこ」に従うのは正しくないだろう。なぜかという、そのような災害状況で困った人を助ける人が誰一人いないとすると、われわれ全員の状況が悪くなり、また、2つ目の状況においてさえ「津波でんでんこ」に従うことが困難になる。ですから、ボランティアの消防団の方がどうするかというのはかなり議論しなければいけませんし、今回の津波で大勢犠牲になったという話です

が、消防隊員や警察官のようにプロフェッショナルで人を助けるような人に関しては、「津波でんでんこ」のルールに一般人と同じように従っては困るだろう。津波が起きたときに、消防隊員や警察官がわれ先に逃げるとするのは困ったことになりますし、たくさんの人を助けるという「津波でんでんこ」の目的がうまく働かないことになるだろうと思います。

といっても、別に最後までいて津波にのまれた方がいいというわけではないのですが、プロフェッショナルの人は別のルールをつくって、どこまで人を助けるか、いつどの時点で自分の身を守るかということを議論しなければいけない。ですから、もしわれわれが警察官や消防隊員にぎりぎりまで人々を助けることを期待できるならば、われわれ全員の状況がよくなるだろうと考えます。

もう1つ難しいのが、自分が消防隊員でも警察官でもなく、父親か母親で、子どもが何人かいる場合はどうするのか。もちろん簡単に助けられれば助けたらいいのですが、ここは難しいですね。「津波でんでんこ」に従ったほうがいいとは分かっているけど、子どもが自分で逃げられないという状況で、とても従えるとは私もなかなか思えないのですが、子どもたちを置いていくことは、心理的には非常に難しいが不可能ではない。山下文男氏の父親の例などがそうだろうと思います。

ただ、ちょっと気を付けていただきたいのは、私もかなり無理だろうとは思っているのですが、それはかなり文化的なものもあって、心理的に絶対無理とわれわれは思ったりするのですが、本当に無理かどうかというは必ずしも明確ではないと思います。今日的な視点で見ると、このお父さんは相当非情だなと思うのですが、いずれにせよこれは、子どもを助けられないという選択肢もあり得るということを示している例だろうと思います。

先ほどの山下文男という災害研究者のお話です。

1933年に津波が町を襲ったとき、家族の誰も、両親も6人の兄弟も、彼が逃げるのを手伝ってくれなかった。当時9歳の彼は、自分で逃げざるを得ず、はだしで雪道を山まで駆けていった。(山下文男『津波で

んでんこ一近代日本の津波史』、新日本出版社 2008 年、223-4 頁)

9 歳の山下氏は死んでもおかしくないような状況だっただろうと思います。

彼は後で自分の友人たちも同じ経験をしたことを知った。彼は、これが助かる人命を最大化するための最善の戦略だと理解した。そこで彼は、いかに非情に見えようとも、共倒れを避けるためには自分の命のために逃げるのを忘れてはならないと強調した。(同上)

山下さんは、今私が言ったのと同じような形で、非常に厳しい、とにかく自分の命を大切にしておいて逃げるのが一番いいやり方なのだということを言っています。親兄弟といえどもそうなのだと言っています。

そこで、最後の結論に入っていきますが、「津波てんでんこ」は、私の考えでは、上で述べた 3 つの状況の全てにおいて正しい避難の指針である、みんなこれに従うべきではないかと思っています。みんなというのは語弊がありまして、例外として、自分が他人を助ける義務を持った職業にある場合は別です。この場合は、別のルールをつくらなくてはなりません。どういうルールにするかというのは、また別のディスカッションが必要です。

災害の状況は非常に例外的です。ですから、通常の場合でわれわれが募金箱を見て募金したいと思うような同情心や共感に従って行動すると、おそらく間違った行動を生み出すような状況になり得ると思うのです。われわれは、共感心、同情心など、いろいろな感情に突き動かされるわけですが、災害の状況は非常に例外的なので、今の話は、むしろそれに従わないことで正しい行動ができる例なのではないか。ですから、われわれの通常の自然な心理的反応が正しい行為を見つける最善のガイドにならないのではないかと思います。

上記の状況で心理的障壁を感じる場合、つまり、「津波てんでんこ」に従うのは無理だというようなバリアを感じる場合、われわれは、ひょっ

とすると教育によってそれを克服すべきなのかもしれない。先ほどの信頼関係を築いた上で、これが一番いいルールだということを教える必要があるかもしれないと思うわけです。

結論です。「津波てんでんこ」の教えは単純であるという美徳があります。誰のことも考えずに、とにかく自分の身を守って逃げろという非常に簡単なルールですが、そのルールをもう少し説明する必要があると思います。少なくとも以下に挙げるようないくつかの点を明確にしないではいけません。

1つ目は、それは利己的な教えではないことを明確にすることです。利己的な人も従えるルールなのですが、必ずしも利己的ではない。

また、人々の間での信頼関係が重要である。これができないと、できる限り多くの人を救うという「津波てんでんこ」の目的が達成できない。

困った人を助けるのが仕事であるような職業にある人々のためには、異なる教え（ルール）を作る必要がある。

それから、心理的に困難というのは、決定的な批判ではないだろう。ここが後で議論になるかなと思っております。

倫理学や哲学に何ができるかという、あまり何もできないと私は思うのですが、それにしても、われわれが従うべきだとか、われわれが子どもに教えようとするルールをこのように倫理的に分析することは、避難の指針について混乱や疑念をなくすためにも不可欠です。先ほどありました集団避難とか、子どもを親が連れて行くルールとか、いろいろなルールがある中で、この状況でどれが一番いいかということをよく考えて、それを教え込まないと、非常にたくさんの人が死ぬ可能性がある。ですから、事前に準備するためにどういうルールを考えるかというときに、こういう分析がたぶん重要になるだろうと思います。

「津波てんでんこ」については、さらに明確化が必要です。今言ったことでは不十分だと思いますが、1つの出発点にはなるかと思います。

このような作業によって、次に大津波が日本や世界のどこかを襲う際にはより多くの人命を救う準備ができるだろうと考えます。以上です。ありがとうございました。■

専門援助職が助けられなかった時

—災害時の援助職における罪悪感とその対処



久田 満

私は、福島での話を中心にします。福島にはかねてからご縁がありまして、ここ 20 年間、毎年一、二度は行っています。今日は、東京電力福島第一原子力発電所のある福島県の沿岸部の話をしたいと思います。

今回の大震災ですが、世界初のトリプル災害と言われています。大地震、大津波、そして原発事故のことですが、実際はトリプルどころか、その後のことを考えれば、風評被害、家族の離散、失業者、様々な精神病理の問題などなど、いくつもの被害が重なった歴史上稀にみる大災害だということが行くたびに感じられます。

私がたびたびお邪魔しているのは、南相馬市にある総合病院です。5階建てで、患者さんが常時200人ぐらいいて、救命救急もあり高度な手術もできる中核病院です。地震が起きたのは2時46分ですが、この写真は、当日の夕方、外来待合室の椅子を全部撤去して、応急の救命救急室状態につくり替えたときの様子です。外来のフロアに簡易ベッドを敷き詰めて、病院スタッフはここで待ち構えていたわけです。阪神・淡路大震災の後、災害時の医療チームがヘリコプターや飛行機で駆け付ける「DMAT」という制度が日本でもできているので、その日の夜には最初の部隊が到着したそうです。ただ、このときは原発の事故はなかったので、予定どおりの活動が続けていたのですが、その後、原子力発電所が爆発したということで、彼らは撤退することになります。

政府は、半径20キロ以内は入ってはいけない危険な区域ということで機械的に「警戒区域」に指定し、ここにいる人はみな出なさいと指示します。一部、東電の作業員の方たちは、今でも過酷な作業を続けています。ノーベル賞をあげてもいいのではないかなと思うような利他的な人たちがここで頑張っています。あとは研究調査に入っている人とか、例外的な人です。南相馬市の一部は警戒区域に入っています。

原発から半径30キロ圏は「避難準備区域」といって、もう1つ原発が爆発したら逃げなさい、あるいはチェルノブイリ並みの大量の放射性物質があふれ出た時は逃げなさい、その準備をしてくださいという区域です。でも、この辺は今でも線量は低くて、普通に暮らしている方が目に付くようになりました。一見普通に見えますが、心の中は分かりません。むしろ飯館村から福島市に向かう辺りの方が汚染されているということが後から分かって避難勧告が出されたというのは、報道されているとおりです。

20キロの線の内側、「警戒区域」に住んでいる人たちは即、避難だったそうです。「着の身着のまま」という言葉を何度も聞きました。もし仮に「1時間さし上げます。その間に大事なものをかばんに詰め込んで、市が用意した大型バスに乗ってください」という余裕があればまだいい。「とにかく逃げろ」、「即、逃げろ」、「そこで爆発したぞ」、「放射能が降っ

てくるぞ」という感じだったそうで、皆さん、家から飛び出したそうです。ここは入ってはいけない地域ですから、現在は、家々がどんどん朽ちていっています。最近、規制が緩んで私も区域内に入ってみたのですが、家はどれも本当に無惨な形になっていました。新築したばかりではないかと思うようなお家もそんな状況でした。

その総合病院に出入りしているうちにいろいろなことが分かってきました。簡単におさらいすると、地震発生当日、3月11日、市内の老人保健施設が倒壊して、泥にまみれた人達が運び込まれてきます。怪我人はあまり多くなくて、ほとんどがおぼれた人です。先程までがらんとしていたフロアが泥で汚れてくる。入ってきたときには男性か女性かも判断できない泥まみれの状態の患者さんばかりでした。すでに亡くなっている人も多かった。次の日になると、低体温の患者が増えてきます。体温がどんどん低くなっていくと命がなくなる。薬もだんだんなくなってくる。そこで最初の爆発があった。その時はそれほど動揺することもなかった。というのは、官房長官の発表が「ただちに健康に被害が及ぶことはない」だったからです。3日目は少し余裕があったのですが、4日目に3号機も爆発した時には、もうこの街は終わりだ。と。原子爆弾が落ちたと思った人が相当いたということですが、この院長先生は、この先どうなるか分からないということで、スタッフを前に次のようなことをおっしゃったそうです。「ここからは皆さんボランティアです。自主的に避難していい。自分の判断で行動して下さい。」自分は院長だからここに残るし、その後どうなってもしょうがないけれども、まだ若い看護師もいるだろうし、小さな子どもを抱えている人もいるだろうし、親の介護をしている人もいるだろう。各自の判断を尊重する。そんなニュアンスだったと想像します。

その後、この病院は周りから孤立し始めます。先ほどDMATと言いましたが、自衛隊もあそこまで入ったら自分の身が危ないということで、先ほど児玉さんがプロフェッショナルは何かあっても助けるべきではないかというような話をされましたが、自衛隊ですら入らなかったという時期が数日間続いたようです。

スタッフもさることながら、何よりも患者さんの安全をということで、今病院に残っている患者さん、近くの病院から避難してきた患者さんも含めて、病院を空にしなければいけない。何故なら、そこはそもそもいられない非常に危険な、放射線が降り注ぐところだというようなイメージだったのです。そんな状況下で、全ての入院患者さんを3月20日までに外部に搬送し終えました。県内には、大きな基幹病院、県立病院、大学病院などがありますし、それ以外に、山形県や新潟県の病院にかなりの患者さんを移送したということです。ご存じのように、その途中に衰弱して亡くなった方もかなりいました。震災に直撃されて亡くなったのではなく、「関連死」と言われる方が、届けがあっただけでも1,600人と最近報道されました。届け出るのが面倒だとか、いろいろな理由で家族がばらばらになって届けられなかったという人もいるということなので、本当はもっと多いはずです。

そのような方を含めて精神的な被災者はどれぐらいいるかということ、関連死の1,600人を足すと、今回亡くなった方と行方不明の方で2万人といわれています。あと、「忘れては困るのは」とよく言われるのですが、ペットです。今はもう本当に家族同様にかわいがられていますから、かなりの数のペットが犠牲になったはずです。亡くなった犬の数がグラフに出たことはないですが。

私は心理学が専門で、しかも臨床心理士ですので、心のケアの必要性は強く感じています。亡くなった方の心のケアは不可能ですが、その近くにいる被災者の数は、亡くなった方の5、6倍はいるだろうと推測します。身内を亡くしたとか、大怪我をしたとか、いわゆる被災者といわれる人の数です。今回、最終的に注目したいのは、自分も被災している、自分も身内の誰かが波にのまれて亡くなっている、家が倒壊している、その他さまざまな、一言でいうと大きな大きなストレスを抱えた人たちの中で、なおかつ同じような状況の人たちのケアに携わらなければならない人たちの心の問題です。最近は、少しでもそういう人たちの力になれることはないかということばかり考えています。支援者の支援です。

実は、最初の頃は、被災者への直接的なケアを考えていました。臨床

心理士はみんなそんなことを考えるのですが、やれ PTSD だ、やれグリーフケアだと言って、直接被災者に関わろうと思うわけです。しかし、徐々に気づいてきたのですが、ご自身も被災者という立場でありながら誰かを支えなければいけない人が大勢いる。義務感というか、ある種の利他的な考えで現地に残らざるを得なかった方、あるいは進んで残った方—そのへんの区別は難しいのですが—が相当いらっしゃる。その人たちのために何かできないかと考えるわけです。

私は、「外からの支援者」という立場です。自分の活動がどれほど支援になっているかはまだよくわかりません。時々メールや電話で現地に呼ばれるので、少なくとも邪魔にはなっていないと思います。ちなみに、私のような外から来る支援者の中にも、強烈な被害を受ける人がいます。消防団とか自衛隊とかです。損傷の激しいご遺体と直面しなくてはいけないとか、目の前で泣き叫ぶ家族の人たちから事情聴取しなければいけないとか、間接的にですが、かなりのダメージを受けている支援者もいます。ですから、全部トータルすると、全く根拠はないのですが、今回、100 万人ぐらいは程度の差こそあれ、心の被災者になっているのではないかと想像しています。

被災者のメンタルヘルスに関しては、少し詳しくお話しておきたいなということがあります。それは、時間の流れに従って心理状態が変化していくということです。震災直後は呆然自失状態です。何が何だか分からない。この地域に高齢者が多いのは皆さんご存じですよ。若者だと、今はすぐスマホとかでインターネット検索して何が起こったのをぱっと見るのでしょうけれど、ここの高齢者は携帯電話すら持っていない人ばかりです。NHK のニュースだけが頼りという感じです。電気がつかない時期があったし、電話もかからないという時期もあったので、最初は何があったかまったく分からない、何も感じられない。無感覚状態です。

それから数日から 1 週間、長い人で 1 カ月ぐらい経つと急に元気になってきます。積極的、発揚的な心理状態です。ある学者はハネムーン期とっていますが、この名前は変えたほうがいいのか、単純に高揚期とでもいえないのではないかと思います。いずれにしても、心をつ

に、日本は一つ、どんな困難にも立ち向かうんだと希望を感じる時期です。こういうところにテレビの取材が入ると「被災地も頑張っていますね」というような報道になります。

しかし、それが数カ月から半年ぐらいたつと、だんだん落ち込む人が増えてきます。まるでジェットコースターが上まで上がつて、あとはヒューッと落ちる感じです。そして、幻滅期に入ります。現実の問題として、家はどうするのか、仕事はどうするのか、ばらばらになった家族はいつ一緒になれるのか。認知症のおふくろの症状が悪化したけれども、どこの病院が入院させてくれるのだろう。このような問題が山ほど、それこそ瓦礫の山のように目の前にあることにあるとき気づき、幻滅期に入ります。もちろん、そこから立ち上がる人もいますが、相当長く続いているようなイメージがあります。1年半経ったからどうなのかということなのですが、どこの被災地に行っても、岩手とか宮城にも行きましたが、そうした状態がまだずっと続いているという状況です。

このような心理的変化の中で、私が注目したいのは生存者症候群です。確かに、強烈なストレスで悪夢を見る PTSD とか、親しい人を亡くして悲しみのどん底に落ち込んでいる悲嘆反応状態も大きな問題です。でも、知られているようであまり知られていない心の問題の一つとして、生き残った人々に見られる生存者症候群、「Survivor syndromes」というのがあります。先ほど申し上げたように、震災発生当初は高揚感があります。「よかったね、生きていて。」「助かったんだ、お前も。」「家族みんな無事だった？ よかったじゃないか。」というような高揚感がある。けれども、じきに「なんで自分だけ残ったんだろう？」、「あいつも死んだのか・・・。」と、だんだん、じわじわと落ち込む時期になります。その後に出てくるのが、今日の中心テーマである罪悪感なのですが、「生き残った自分はその価値がある人間だったのか」「自分が残ったその背景に、何人もの人が犠牲になっている」というようなことが現実的に分かってくるのです。

一方、今回顕著だったのが、怒りです。政府の対応はどうだったか、東電は何をやっていたのか、国のエネルギー政策は間違っていたんじゃないか。よく「やり場のない怒りに、犠牲者は・・・」というような表

現があるのですが、今回はいろいろな怒りの矛先がクリアにあって、やり場がはっきりしていますので、「あいつらはどう思っているんだ!」「何してるんだ!」と。僕も一緒になって「そうだ、そうだ」という気持ちになってきます。だいたい経ってから東電の社長があちこち謝りに行きましたけれど、あの人たちはあの人たちの言い分がいろいろあるでしょう。ですから、自分は中立的にいるつもりではあるのですが、しかし、もっと早く何とかできなかったのかと思います。今、民主党と自民党とが論争していますが、やはり遅い。なぜ、これだけいろいろなことがポンポン進む時代にちんたらしているのかという怒りも、現地の人のそばにいて話を聞いていると起こってきます。

しかし、この2つの感情は、実は抑うつ状態という大きな、暗い、深い闇の世界の中の一部にすぎません。先ほどから言っていますように、なぜ自分だけ生き残っているのか。現実の生活の中でも苦難が次から次へと襲ってくる状況では、いつそ自分も死ねばよかったと思ってしまうのも理解できるような気がします。地震が起きた。津波が来る。犬が向こうでキャンキャン鳴いている。首輪にリードがかかっている。でも、自分たちは逃げなくてはいけない。そんな時はどうするのか。犬より自分だろうということが終わるのか。先ほどの「津波でんでんこ」の話では、見捨ててきた人やペットに対する生き延びた人の気持ちの問題が残るように思いましたし、たとえば老親の介護をしている人はどうなのだろうかと思いました。家には寝たきりのおやじがいる。申し訳ない。おやじは苦勞して自分を高校まで行かせてくれたというようなことが、わつとよみがえってくると、罪責感と怒り、そしてそれを中核にした抑うつ状態がずっと続くということになります。

同じような罪悪感や罪責感、専門援助職の中にも見られます。例えば、こんなことを直接僕に話してくれた人がいました。福島市内の医療施設で働いているあるドクターです。あの日はすごく忙しかった、と。いろいろなところから患者が搬送されてくるし、沿岸部からは応援部隊をよこせと言う。しかし、こっちはこっちで普段から仕事がいっぱいある。震災のあるなしにかかわらず、病院の医師というのは、基本的にろ

くに寝ずに、休みも取らずに働いている。そこにあの震災が起きて、患者さんが搬送されてきたりして、責任のある立場にいるということもあって、何倍も忙しくなった。実は、自分には小学生の娘がいる。普通の家族だったら、放射線のことも含めて、娘の健康が気になるだろう。実家は関東だから、そこに避難させることができるのだけれども、立場上いろいろあって娘をここにいさせている。ちなみに、その人は放射線についてはそれほど危険だという認識はない方だと思います。いろいろな説があって困るのですが、ちょっと吸い込んだだけですぐ癌になるぐらいに思っている人と、あの程度の線量だったら20年や30年たっても大して変わらないのではないかというぐらいのひと、専門家の間でもかなりの幅があります。この人は、どちらかというと安全だろうと考えた人なのだろうと思います。すごく頑張っているのだという話をしながら、結局それはなぜかという、実は阪神・淡路大震災のとき、自分はバリバリの臨床医だったが、いろいろな理由をこじつけて、現地には行かなかった。今でも後ろめたさがある。そういうことでした。

もう一人、元教え子なのですが、ある東京の看護系大学の40代の教員の話です。自分は災害看護を授業で扱っているし、こういう大災害があったら看護師はこう動くのだと学生に教えている。研究的なこともやっている。自分の周囲を見ていると、岩手県との間で連携関係があってもしょうちゅう行っているけれども、自分はまだ一回も行ったことがない。実は、夫は別のところに単身赴任していて、小学生の娘がいる。近くにいる両親を頼りながら娘を育てている。そんな状況なので行けない。忸怩たる思いだ、と。彼女からこんな言葉が出るとは驚きでした。

それから、さらに深刻な証言ですが、地震発生当時、原発の近くの病院で働いていた40代の看護師の話を聞くことができました。この後どうなるか、ある種不安を感じながらも一生懸命勤務していた。3月13日に最初原発の爆発があった。先ほど少し話題にしましたが、この人の働いている病院は20キロ圏内にあって、1分でも2分でも早く避難しなさいと言われた。全患者、全職員に避難命令が出た。ほとんどの同僚は、患者と一緒により安全な病院に移った。でも、わが身をふり返ると、

私には小学生の娘がいる。実の妹が東京にいたので、放射能の恐怖があって、そこに避難した。もう二度と福島に戻れない。

Beverley Raphael というオーストラリアの災害精神科医が書いた「When disaster strikes (邦訳：災害の襲うとき)」という本は、大災害が起こったときに人はどう行動するのかを詳細に記述している古典的な文献の一つですが、その中にこんな言葉を見つけました。「自責的心的外傷(responsibility trauma)」という言葉です。もっと勇気のある行動を取るべきだったとか、逃げるべきではなかったとか、もっとやることがあった。でもしなかった。そんな場合は、sense of shame and guilty (恥辱感と罪責感)が残る。あるいは、このような葛藤状態で家族や仲間を助けられなかった者や、自分の安全を優先して助けを求める誰かを無視して避難した人たち。そういう人の心の中には特殊なトラウマが残る。

私も、ある種の専門職が助けるべき人を助けられなかった場合の罪悪感、かなり長期になるのではないかと思います。阪神・淡路のことをまだ心に抱えているドクターがいた。ずっと東京にいて、被災地と直接関係ない人だと思うのですが、看護職だったら行くべきだろうという強い義務感を感じているナースがいる。あるいは、最後の方のように、思い出すたびに涙が出る。自分のやった行為に対して、後ろめたさを感じている人がある。

「それでも他人を助けるべきか」という今日の話題になるのですが、さあどうしますかという話をたぶんこの後われわれ3人で、あるいは会場の皆さんとご一緒に考えていくのだらうと思います。私としては、今日の資料を作りながら、やはり助けた方がいいのではないのかなと思いました。ただ、その際に考慮すべきポイントがあります。それは、今回の災害が地震や津波だけではなく、原発の問題が大きかったということです。

どういうことかということ、まず第一に、誰も過去に経験したことのない異常事態だったということです。トリプル災害だということもその1つですし、放射線とは何か、分かっているようで誰も分かっていた。第二に、院長の「自主的に判断して欲しい」という指示。それはつまり、

あなたはあなたの行動を自分で決めていいですよ。むしろ決めなさいということです。そう言われた人は本当に困ると思います。消防団や自衛隊は、もしかしたら気が楽かもしれません。上の命令は絶対だから。それに逆らえば懲罰になる。軍隊はもっとすごいです。敵前逃亡は死刑です。しかし、看護師やドクターにはそういう法律がないようです。自分で決めなくてはいけない。第三に、熟慮する時間がなかったということ。3日考えて話し合っただけの方針を決めようなどという場合ではない。今そこで爆発しているという緊急時にどうするか。

放射線の影響というのはどのようなものか。もちろん外部被曝はひどいだろうくらいの常識はあるかもしれませんが、空気を吸ったとか、汚染された食物を食べたとかという内部被曝、それもそれほどの線量ではない状態が長く続いた場合どうなるかというエビデンスが全くない状況だそうです。しかも、避難しても居残ってもどちらを選んでも悔いが残る。避難した場合、家族は助けられるけれども、患者さんを見捨てなければいけない。もし残留した場合はどうなるか。この人たちにもインタビューしましたが、患者を助けることができたし、今は比較的元気にやっている。しかし、自分と一緒に残った幼い子どもたちのことを考えると、その子たちの健康がずっと気になる。今、甲状腺がんのことが問題になっていますが、もし10年後に、福島のあの地域にいた子どもになんらかの疾患が大量に発生した場合、残留を決心したこの人は、罪悪感に苛まれることになるのではないかと思います。

こういった種類の罪悪感についてなんとかしたいと思って、今調べているのですが、そもそも罪悪感の生起メカニズムに関してはあまり研究が進んでいないようです。私としてはそれを解明し、そしてその上で罪悪感を低減できるプログラムが開発できないかと考えています。これは臨床心理士としての義務感です。こういうことが二度とあってはいけません。日本には50の原発があるそうで、あるいは中国や韓国、その他世界中の原子力発電所で何らかの事件が起きたときに、そこにいる人を守るべき人たちがいます。

今日は時間の関係であまり触れられませんでした。ある学校の養護

教諭、つまり保健室の先生も同じようなことを言っていました。大震災があれば、自動的に学校が避難所になります。計画的にそうしている自治体もあるようです。学校には必ず保健室がある。その保健室というのは、病人や怪我人の仮設入院施設になります。しかし、養護の先生も自分の家族のことがあるわけですから、どちらを優先にするかでとても悩むはずです。そうならないような具体的で予防的な対策が取れないか。そんなことを考えながら、福島通いを続けています。■

参考文献

金澤幸夫「東日本大震災以降の当院」『全国自治体病院協議会雑誌』第50巻第10号、1～3頁、2011年。

南相馬市立総合病院「安心して戻れる街を一原発30キロ圏内の医療」『病院』第70巻第11号、2011年。

太田圭介『南相馬10日間の救命医療』時事通信社、2011年。

Raphael, B. *When disaster strikes: How individuals and communities cope with catastrophe*. Basic Books, Inc. New York. 1986. (石丸正訳『災害の襲うときーカタストロフィの精神医学』みすず書房、1989年。)

全体討論



司会：奥田太郎

【司会】 まず、小田先生からお二人に対して、議論を深めたいこと、聞きたいこと等があれば、よろしくお願いします。

【小田】 児玉さんにお聞きしたいことがあります。できるだけ多くの命を救うということが最大の善、最大のいいことだというのが、一応お話の前提になっているわけですね。

【児玉】 はい。

【小田】 それを確認したかったのです。本当にそれがいいことなのだろうかというのがちょっと疑問で、そうすると、何がいいことなのだろうというのがよく分からなくなってくるのですが、その辺は哲学の方の

お仕事でしょうし、お聞きしたい。

津波のジレンマの場合、AさんとBさんがお互いを探さずにてんでんこに逃げたほうが、お互いにとっていいのですが、例えばAさんとBさんが恋人同士だったら、お互いを探し合うのも、それはそれで美しいのではないかと思います。てんでんこに逃げて生き残って、それで本当に幸せなのだろうかという疑問が湧きました。ほとんど感想ですけれども。

【児玉】 功利主義からすると、おそらく幸福を最大化できることが重要だということになります。片方が死んで片方が生き残るという状況も起る中で、たくさんの人の命が残ることが本当に一番幸福になるかどうかは、正直、アームチェアから今考えているだけでは分からないですね。今の恋人の事例だと、両方助かることが無理ということがかなりの確率で分かってしまうのであれば、両方死んだほうがかえって幸せなのかもしれないと思います。

ただ、一般的原則としてのルールですよ。教育として教えるときにどう教えるか。あの人がかなりの確率で亡くなると思うのなら、もう死んだほうが、その後ずっと生き残るよりいいと思う人にとっては、このルールは当てはまらないかもしれません。原則としてのルールということです。

私も質問してよろしいですか。2つあります。小田先生には、利他心ともう1つ、最近、公平性（フェアネス）が進化の過程で身に付いてきたという話もあるのではないかと思います。先ほどの話では、仮説が2つあって、1つ目は心理的基盤から倫理が説明できる、もう1つは、そういったものとは別のものとして倫理が説明されるということでしたが、公平性の話は仮説1に入るのか、仮説2に入るのかということです。

久田先生に尋ねたいのは、『災害に向きあう』（岩波書店）という本の中でも負い目をどう考えるかという話がされているのですが、答えがよく分からないのです。罪悪感、負い目を全く感じないのも、倫理的に困るのではないかという気もするのですが、良い負い目、悪い

負い目があるのではないかと思います。負い目というのはどの程度感じて、どの程度感じるべきでないのか。最近、戦争から帰ってきた兵士の PTSD に対して、記憶をなくすという治療が今後方向性として考えられるのではないかという話もあると思うのですが、罪悪感をどの程度和らげるべきなのか。その程度が心理学の分野で何か言われていたら、教えていただきたいと思います。

【小田】 ヒトもそうですし、他の動物でもそうではないかと言われているのですが、公平性に対する志向が強いということを示す実験はあります。ただ、そうした行動傾向と倫理がどう関わっているかについては、今のところほとんど研究がないというか、やっている人も少ないので、公平性に関して倫理観とどうつながっているかというのは、私の知る限りではまだあまり研究されていないと思います。

しゃべるついでに、私も久田さんに対するコメントになってしまうのですが、先ほどの児玉さんの質問にもいろいろ関わる話なのですが、援助者のトラウマというのは、何か役に立つことがあるのではないかと。われわれ行動学者は、人の持っている傾向というのは何かしら適応的なのではないかと考えてしまうので、例えばお話に出てきた久田さんの教え子の方も、普段、ものすごく周りから信頼されている優秀な方だと思うのです。そういう傾向を持っているからこそ、災害がないような日常生活では非常に社会的に優秀であるということになっている。その辺の裏返しとして、何か非日常の災害が起こってしまうと、逆に責任感がマイナスになって、トラウマみたいなものになってしまうのではないかと。そう感じる傾向というのは、ある意味適応的と考えてもいいのかなと思いました。

【司会】 久田さん、お願いします。

【久田】 自分の質問と皆さんからいただいた質問に対する答えが混在しそうですが、お答えします。罪悪感についてですが、実は、これは心理学では、最初はいいものとして研究されていました。子どもに罪悪感を植え付けましょう。そのためには悪いことをしたら、ちゃんと叱る。「天知る、地知る。」だから悪いことをするなと。その基本には人間は

罪深いのだという西洋の教え方があります。

ただ、逆にそれが行き過ぎると、誰でもそんな状況ならどっちを取ってもしようがないのではないかということについてまで責められて、その後の人生がその人にとって不幸になるのではないか。そういう心配が、今回、にわかにな自分の中で浮かび上がってきました。不必要な罪悪感と言うと言い過ぎかもしれませんが。

それに関連して言うと、その罪悪感を補うが故に自分の限界をはるかに超えて復興活動に従事する人にも出会いました。休まず、やめず、体を壊すまでやるという人です。裏を返すと、あのときもつとできたのにとか、自分が1日だけ避難してどこかに行っていたことがすごく引っ掛かっている。そんなレベルでなくても、もうちょっと何かしてあげられたのに手を抜いたとか、それが引っ掛かっているが故に頑張りすぎて体を壊し燃え尽きています。この場合、燃え尽きるというのも、かなりシビアな、治療が必要なレベルでの燃え尽き状態です。ですから、罪悪感は、ありすぎてもまずいし、なさすぎてもまずい。どの辺がいいのだろうかということが、ずっと僕の中では課題になっています。

人の命はそんなに大切なのかということから触発されて考えたことですが、僕がもし被災地にいて、今のような対人援助の仕事をしているとしたら、生き延びて後々そんなつらい目に遭うのなら、「ヒーローに成り損ねた男」みたいな感じで、むしろ死んだ方がいいなとも思うのです。被災地には必ずヒーロー（活躍する人）が誕生するようです。新聞に載った人の数も多いですね。市庁舎の上ですずっと警告の放送をし続けた若い女性もいました。見方によれば悲劇但也有りますが、そっちの方がよほど家族にとってもいいし、自分の人生でも「波にのまれて死んだ」の方が格好がいい。「スタコラ逃げた」だと後から嫌な目に遭う。先ほどは言いませんでしたが、のちのち周囲から非難されることもあるのです。今だからこそ放射線量が落ちて、まあまあ日常に戻ったので、福島でも「あなた、あのとき逃げちゃって」みたいなことが話の端々に出たりするのですが、そうするとまた傷つく人もいます。そんなことを思えば、自分なら死んだ方がいいし、生きて恥をさらすの

がつらい。こういうと戦争時代の「捕虜になるな」みたいなことに近い、ちょっとまずい思想になるのかもしれませんが。

助けるべきかと言われれば、助けに行つて命をなくしてもいいという気にもなりますし、今だったらきっとそうだろうと思います。危険を顧みずというような格好いい理由ではなくて、あとから後ろめたい気持ちで生きるのが嫌だから、後ろ指を指されるのが嫌だから、危険があつても行くのではないかという気がします、本当のところはよく分かりません。もうビビってしまつて、足腰が立たなくなるかもしれませんし。

小田先生に簡単な質問として投げかけたいのは、利他的な生き方をすると、それは一つの進化だし、大げさに言えば、その個体や種が守られるような感じで受け止めたのですが、要するに、利他的な人というのは優しく、思いやりがあつてという人ですよね。そういう人は大体好かれるし、頼りにされるし、またそれが励みになって頑張ったりする。そういう単純な置き換えで、小学生に語り掛けてもよろしいでしょうか。

【小田】 最近うちの研究室で、利他的な人がもてるかどうかという研究をしたのです。というのは、進化生物学で性淘汰というのがあつて、例えば、クジャクの雌は非常に地味で、雄だけが非常にきれいな尾羽を持っているのですが、あれを持っていることに何の意味があるのか。非常に邪魔だし、何の役にも立たないし、むしろマイナスなわけです。ではなぜあんなものを雄が持っているかというと、要するに、あれのせいで雌にもてるわけです。ですから、個体にとって一見マイナスになるような特徴でも、それを持っていることによって雌にもてれば、そこで遺伝子が残せるわけですから、残っていく。

もしかしたら利他行動というものもそれと同じ部分があるのかもしれないという話があります。利他行動というものも、結局本人が損をして相手を助けるわけですが、例えばそれをする男性が女性にもてれば、一見損をするような利他行動でも残っていくのではないかと。

われわれも最近、大学生を相手にした質問調査なのですが、どうい

う利他性を持った人が好みかということを聞いた研究をしました。そうするとやはり、他人に対する利他行動に対しては、男性よりも女性の方が評価するのです。単純に言うと、男性がボランティアをしてもてるという結果が出ました。なぜかという、それが男性の持っている能力とかそういったものを表しているからです。要するに、利他行動というのは自分が損をして相手を助けるわけですが、利他行動をしているということは、それだけの余裕があるというか、利他行動するだけの能力があるということを示している。そういうシグナルになっているわけです。だから、女性はそういう人を好むのだという説明ができるわけです。

実際、そうやって質問調査をすると、特に他人に対する利他性を示している男性がもてることがわかるので、それが全ての説明ではないと思うのですが、1つには、異性に対してもてるから利他行動が進化したというところもあると思います。

もう1つは、単純に性淘汰ではなく、むしろ社会的な意味で、先ほどの間接互惠性の話ではありませんが、例えば生涯のパートナーなり仲間を選ぶときに、利他性の高い人の方が選ばれるという結果も実験で示されています。また、選ばれる方も、他人が見ているときの方がそういうことをしやすいのです。例えば、教室にどこかのボランティア団体の人が来て何か協力してくださいというと、自分の名前がはつきり出ないときよりも、みんなの前で名前を呼ばれるときの方がより協力しやすいというのもあって、異性関係だけにかかわらず、ある種、利他行動は、周りに対する宣伝という部分があると思います。

【司会】 児玉さん、どうですか。

【児玉】 先ほどの罪悪感とも関係するのですが、行き過ぎの罪悪感というのは何とかした方がいいと私も思うのです。罪悪感と「津波てんでんこ」とは関係していると思います。やはりそこには、「他人を助けるべきである」という批判が非常に強く内面化されているわけですね。助けるべきである、でも助けられなかった、もっと助けるべきだったということで、罪悪感という感情の背景には、規範的な信念というか、規範

的な考えがあると思うのです。

今回は出さなかったのですが、清水哲郎先生など、何人かの論者が「津波てんでんこ」について言っていることで、私もある程度そうだなと思うことがあります。それは、津波で避難した後に自分だけ助かったり一部の人が死んでしまったりしたときに「津波てんでんこだ」と言うのは、罪悪感を弱めるための意味を持っているのだということです。ですから、分析と言うほどの分析ではないのですが、罪悪感の背後には「他人を助けるべきだ」という強い規範が背景にあり、それゆえに罪悪感が強くなるわけで、「津波てんでんこでいいんだ」というような考え方が社会や集団の中になれば、罪悪感はもちろん抱くでしょうけれども、負い目を和らげる働きを果たすのだということを何人かの論者が指摘しています。

【久田】 お二人のほうが心理学に詳しいようで、自分の無知をさらけ出すようですが、自分がある行動を取った原因を何のせいにするかという問題が関係しているように思います。それを「原因帰属」というのですが、罪悪感というのはある種自分を責める感情ですから、自分の能力のなさとか、自分の道徳心のなさではなくて、とんでもないことが起きたのだとか、何百年にもわたる掟があったから従ったのだと言うほうが罪悪感が大いに和らぐという説明もできると思います。

利他的な男がもてるというのは確かにそうなのですが、うちの奥さんからは、僕がしょっちゅう福島に行くものですから、「もっと私に対して利他的であれ」みたいに言われます。これはどうしたらいいのでしょうか。すみません、どうでもいい話でした。

【司会】 小田さん、どうでしょうか。

【小田】 それは実は非常に重要な問題で、当然女性としては、男性の資源を自分あるいは自分の子どもに投資してほしいわけですね。だから、男性を評価するシグナルとして利他性というのがあるのですが、実際に自分のパートナーになってみると、当然その利他性が他人に行っては困るわけで、自分に来てもらわなければいけない。そこが多少矛盾しているところがあって、難しい点ではあります。

ただ、われわれのアンケートでは、相手に対する好みを聞くときに、短期的な相手と長期的な相手、要するに今付き合う相手と結婚相手のそれぞれで、利他行動の対象を家族と友人と赤の他人に分けて、どういう利他行動が異性の相手について好みですかと聞いたところ、長期的な相手だと、家族に対する利他行動がすごく評価されます。短期的な相手だと友人が一番多くて、他人に対する利他行動はどちらも差がないぐらいでした。

そういう点では、長期的な相手になると、家族に対する利他行動が非常に評価されて、たぶんそれは久田さんがおっしゃった点だと思うのです。長期的な関係にならなければ、投資がこちらに向くかどうかというのはまだ二の次の問題なのですが、長期的な相手になると、当然こちらに投資してもらわなければいけないので、むしろそこで血縁に対する利他行動の方が重視されるということなのだと思います。

【司会】 ありがとうございます。では、いよいよ会場の皆さんからいただいている質問紙に基づく討論に移らせていただきます。確認に近い質問から行きます。まず、小田先生に対してです。「大変興味深く拝聴させていただきました。分配金の実験について、被験者の判断の根拠となったのは何なのでしょうか。顔つき、あるいは表情でしょうか。これについてインタビュー等は行われたのでしょうか。」

【小田】 利他性の高い人と低い人をどういう手掛かりで見分けたかということだと思うのですが、分配実験の方では聞いていません。実は、あの実験の前にもう1個、同じ10人の動画を刺激に使って、単純に利他性がどれくらい高いか低いかを評価してもらった実験があります。分配を委任するかしないかという意思決定ではなくて、ただ単に利他性が高いか低いかの印象を評価してもらいました。SD法というのですが、「優しい」とか、「温かい」とか、「知的な」とか、形容詞を幾つか並べて、どのような印象を持ったかというのを分析する方法を使ってやってみたのです。そうすると、やはり笑顔です。どれくらい笑ったかどうかということが非常に重要であると実験から示唆されました。

それから、われわれのところでは検出しなかったのですが、ほぼ同じ実験をイギリスでもやっていて、その実験では、確かに笑顔が大事なのですが、その笑顔の左右対称性を調べたら、そこでも差が出ました。心から笑っていないと、笑顔というのは左右対称にならないのです。無理やり顔をつくっているからです。ところが、心から笑うと左右対称になる。そちらの実験では、真正面から刺激の人たちを撮っていたので、左右対称性がきれいに出了ましたが、結果として非対称な人はあまり利他的だとは思われないし、実際にも利他的ではない。ただ、われわれの実験の場合は、斜めから撮っていて、真正面から撮っていませんでした。それもあるのだと思うのですが、対称性については差が出ませんでした。だから、基本的にはよくニコニコしているというのが一番決め手になったのではないかと思います。

【司会】 もともと笑い方がうまい人もいれば、もともと笑ったような顔の人もいますね。たぶん小田さんは笑ったような顔の人かなと思うのですが。

【小田】 元の顔つきというのはありますよね。

【司会】 それもやはり大きいのですよね。

【小田】 そうですね。われわれは動画を使ったのですが、静止画を使って同じようなことをした研究があつて、それでもある程度見極めができるようなので、動きも大事なのですが、元の顔つきというのがあるのだと思います。

【司会】 ありがとうございます。次の質問も小田先生に対してです。「赤の他人に利他的行動をしたときに、返ってくれば釣り合いが取れるというお話でしたが、返ってこない可能性を考慮すると、不利益になってしまうのではないかと思います。いかがでしょうか。」

【小田】 そこでなぜ利他行動をするのかというのが、まさに疑問なのです。それが知りたいわけです。だから、答えとしては、「まさに知りたい」ということです。

【司会】 なるほど。その中で、裏切り者を見ていくとか、いろいろなことがされているのですよね。

【小田】 ええ。だから、ひとつの答えとして考えられているのが、ご説明した間接互惠性です。直接返ってこなくても、例えばそれをする事によって自分の評判が上がる。そうすると、社会の中でほかの人からいいことをしてもらええる可能性がある。あるいは、先ほど話したように、男性の場合であれば女性が見ていて、よりもてるようになる。そうすると適応度が上がりますから、直接返ってこなくても、おそらくはそういった要因によって、赤の他人に対する利他行動が維持されているのではないかと考えられます。

【司会】 同じ方の質問です。「映像を見せる実験についてですが、映像を撮られた側の人（高利他主義者 6 名、低利他主義者 4 名）の提示した配分額が幾らだったのか気になります。」これはおそらく、実験の詳細に関してもう少し説明してくださいということだと思います。

【小田】 これは、実際には聞いていません。要するに、実験参加者に対して嘘をついているわけですね。実際には聞いていないのですが、聞きましたと教示して、それについては実験が終わった後にちゃんと謝っています。デブリーフィングというのですが、実験のために嘘をついて、後で、実はこういうことだと説明するわけです。実際には、全員 200 円という形で支払っています。

【司会】 実験上、その辺はあまり重要ではないということで、嘘をついたということですか。

【小田】 そうですね。それは別に結果には影響しません。

【司会】 あともう 1 点ですが、「人は利他行動と同時に他者を攻撃する、場合によっては殺傷するような、ジェノサイドのような行動も取り得ると思います。人類学、心理学で、こういった行動は利他行動と関連してどう説明されているのでしょうか。」そのような研究はあるのかということだと思います。

【小田】 関連するかどうかは分からないのですが、人が内集団と外集団を分けるということは昔から社会心理学などで言われていて、最小集団実験というのですが、すごく些細なことで、ある集団と別の集団を分けるのです。例えば、2つの絵を提示してどちらの絵が好みかとか、



どうでもいいような基準で2つの集団を分けるのですが、その状態で、例えば今日お話ししたようないろいろな経済ゲームみたいな実験をすると、やっぱり自分の集団の人を優遇するのです。その集団は些細な基準で分けられただけであって、自分とは何の関係もないのですが、でも自分はA集団であってB集団ではないと言われると、A集団の人間の方を優遇するという傾向が人にはあるんですね。

だから、人にはそうやって内集団びいきをする傾向があるということでは言われていて、それは要するに外集団との差別をつけるということですから、それが一方で、ジェノサイドや戦争などにつながっていると思うのです。結局、われわれが持っている文化というのも、そうやってある集団と別の集団を分けるものです。例えば、宗教などでも、この人はキリスト教で、この人はイスラム教という形で、集団を分ける理由になってしまっている。結局、そこで内集団びいきと外集団との区分が起きて、ジェノサイドなどが起こるのではないかということ

は考えています。

【司会】 ある意味では、われわれは普遍的に利他的にはなれないというか、利他性の裏返しとしての内集団・外集団化があるといった理解でよろしいですか。

【小田】 もともと人が小集団で進化してきていますからね。基本的な考え方としては、もともと人の行動傾向が進化した環境というのがあって、それに対して適応したわれわれの心があるわけです。人類は、昔はこんなにグローバルではないし、通信手段もないわけで、今よりかなり小集団で生活してきた。そういう状態がずっと続いていたし、人にとっての社会というのは小集団だったのです。ですから、おそらくはもっと小さい集団に適応した形で、認知能力や社会的な意思決定も進化してきたのではないかと推測します。それを文明によってどれだけ変えられるかですね。たぶんそこが大きな問題になってくると思います。

【司会】 道徳性というのは、そういう内集団、外集団を越えて主張されることがあるので、講演の最後に小田さんがおっしゃっていた利他行動と倫理の関係性は、そういう意味ではシビアな問題であるし、面白いところなのかなと思います。

【小田】 そうですね。

【司会】 ありがとうございます。続きまして、児玉さんへの質問です。

まず、コメント的なものから。「津波てんでんこは、私には当然のように思われます。むしろ、どうしてそれが問題になるかがよく分かりません。例えば、空襲のときには、各人がそれぞれの場所から逃げたのではないのでしょうか。だから、多くの場合に家族は空襲の後で再会したのではないのでしょうか。そうすると、空襲の場合と津波の場合とで何が違うのでしょうか。」

【児玉】 戦争も災害と考えられるとして、いろいろな災害があると思うのですが、津波は特殊だと言われることがあります。例えば、上から爆弾が落ちてきたら、とにかくすぐに走って逃げるしかない。逆に、オーストラリアでは山火事や洪水もあるのですが、すぐに避難しなくてもよい場合が多く、時間の感覚がちょっと違うんですね。他方、津波は

30分から1時間で来て、その間に対応しなくてはいけない。津波には、助けに行くこともできるし、逃げることもできる、どの時点で逃げるところに切り替えるかも難しいという、災害の中でも特殊な条件がそろっていると思うのです。それで、「津波てんでんこ」が特に重要になるのだと思います。

文科省が「津波てんでんこ」を災害教育に使おうと言うのですが、これをいろいろなところに適用するのはちょっと気を付けたほうがいいと思います。確かに、津波の状況では、これが一番たくさんの人を助けるためのいいルールではないかと思うのですが、他の状況ではこれが本当にいいのか。それから、先ほど紹介した『災害に向き合う』でもある先生が書いているのですが、「津波てんでんこ」を「生きる力」といったフレーズに結び付けて、社会の荒波の中で生きるためにこれを身に付けたほうがいいという話を文科省がしていたりもするのですが、それはあまりよくないのではないかと言うのです。その通りだと思います。この状況では「津波てんでんこ」は非常にいいのですが、他のところに適用するのは気を付けた方がいい。当たり前のように思えるのですが、「津波てんでんこ」は津波という難しい状況の中で力を発揮するルールだと思います。

【司会】 続いて、今の話につながるものを。「津波てんでんこの行動は、むしろ生物的というか原始的行動に思えて、もう一方の利他的行動は社会的で、より高度な行動であると感じました。」「津波てんでんこの行動をとる場合は、その危険度がどれくらい分からない時点で判断するところが難しいと思います。」これらはコメントですが、おそらく、今児玉さんがおっしゃった、津波の場合は時間が短いがある程度はある、という部分とも関係しているのかなと思います。

【児玉】 そうですね。生物学的に普通といわれるのは、利己的な人だったらこれに飛び付くのではないかという示唆もあると思うのですが、「津波てんでんこ」は、ルールとして非常に高度ではないかと思います。小さい子は、うちの娘もそうですが、欲しいものがあつたらそのまま手を伸ばすわけです。しかし、自分の子どもを助けたい、あるいは自

分のパートナーを助けたいと思ったときに、そのままそのパートナーがいるところに走っていくのではなくて、むしろ山のほうに行くというのは、自分だけを助けるというのではなくて、それ自体、利他的でもあると思うのです。もしも自分が相手のいる方に向かうと、相手も助けに来る可能性があるので、上に行くというのは、非常に高度なルールで、人間の心理からしてやりにくいものではないかと思います。そういう意味では、高度な教育が必要だと思っています。

【司会】 その関連で小田さんに聞きたいのですが、小田さんは、ヒト以外の霊長類の研究もなさっています。おそらくこのコメントを書かれた方は、非常に短時間で危機が迫っているという状況で、「クモの子を散らす」ではないですけども、自分の命を守るために逃避行動を取るのが生物として普通ではないかという考えで、人間もやはりそうなのだろうと言われているのでしょうか。小田さんの講演では、人間というのはそもそも利他的に行為してしまう生物なのだという言い方でしたが、こういうコメントに対して、何か示唆があればお願いします。

【小田】 状況によって違うと思うのです。なぜ危機に陥ったら仲間を助けようと思うのかというと、集団でいたほうが得な場合、例えば助け合って何とか逃げたり、助け合って何かと戦ったりという場合は、お互いばらばらに逃げるのではなく、相手を探してということをするのですが、津波というのは、そういう点では、やっぱりちょっと特殊だと思うのです。要するに、津波が来たら、集団でいたところで何の利益もないわけです。

例えば、どこかから野生動物が襲ってきたら、1人で逃げず、2、3人でチームを組んで対抗したら何とかなるかもしれないけれども、津波ではそれが全くできないわけですね。だから、ある意味非常に特殊な状況であって、こちらが何をしても抵抗できないような状態だったら、ばらばらに逃げたほうがいいだろうというのはあると思います。

ところが、津波のような状況はなかなかないので、そうすると、それ以外の状況でやるような方法が出てきて、やはり仲間で固まっていつてしまいます。他の危機的な状況では、仲間で固まって何かする方が

得だったと思うのです。おそらく、そういう対応をするようにできていて、それが津波というどうしようもない巨大なものに襲われるという状況で誤作動してしまうということなのではないかと思います。

【司会】 この点についてもう少し議論を深めたい気もしますが、児玉さんへの質問に戻ります。「非常時・極限状況でのジレンマをめぐる議論。他方で、非常時を想定外とせず、平時のうちに非常時のために備える議論の中での津波てんでんこ。これら2つ議論の相があるだろう。非常時のときのジレンマをめぐる議論での津波てんでんこと、非常時を想定外とせずに、平時のうちに非常時に備えてやる議論の中での津波てんでんこの位置付け。この両面の関係について、考察すべきかと思いますが、どうでしょうか。」

【児玉】 私が十分理解しているかは分かりませんが、お答えします。非常に重要な問題で、先ほどのお話にもありましたが、非常時に判断したり、思った通り心に浮かんだ通りに行動するというのではなくて、「非常時にはこのルール」という形で規範に従う必要があると思うのです。何度も言っているのですが、非常に高度なことが要求されるわけです。ですから、非常時・極限のためのルールなのですが、津波が起きたとき、ある種の条件がそろったときに、ある意味でオートマチックにそれに従うような形で行動できるように、平時のときに非常時のことを考えて勉強しておかなければいけない。信頼関係も、そのためにつくっておかなくてはいけない。

功利主義に対する大きな誤解として、功利主義者はその状況においてどうやったら幸福が最大化できるか、その場で考えなくてはいけないというのがあるのですが、そんなことをしていると津波のときには困るわけです。起きたときにはもうルールが決まっている。つまり原則（principle）に従って行動できるというのが非常に重要ですので、非常時に使える原則を平時から用意していることが大事です。最近の災害事前計画も大体そういう発想に立っていると思いますが、そのときには、思いやりを持って行動しようとか、最善の行為をしようというのではなくて、原則に従って行動しようというわけです。そのとき

の原則が「津波てんでんこ」だと、そういう形で考える必要があるのではないかと思います。

お答えになったか分からないのですが、もしお答えになっていなければ、継いでいただければと思います。

【司会】 どうでしょう。これは結構厄介な問題だと思いますが、もし付け加えることがあれば、質問者の方、どうぞ。

【参加者 A】 質問紙に書いた私の質問については、適切にお答えいただいたと思います。ありがとうございます。

少し敷衍させていただきますと、「津波てんでんこ」は、児玉さんのご講演にもありましたように、言葉は比較的新しいけれども、考え方は昔からあるということです。その昔からあるというときの「津波てんでんこ」の時代と、今の時代は、全く違うのですよね。たぶん寿命も 50 歳、60 歳という時代で、現代で言えば定年前の人が人口の大半を占めているような時代だったのではないかと思います。

今は超高齢化を迎えて、児玉さんのお話にもあったように、自分で逃げられない人がいっぱいいる時代なので、基本的には、「津波てんでんこ」を原則にして改革というのはあり得ないでしょう。

ですから、極限状況のために平時から備えるときに、「津波てんでんこ」という原則はあるけれども、みんながてんでんに、とにかく逃げられる状況をどのようにつくっていくかという対策はいるので、高齢者をどうやって避難させるのか、その模索が今あると思うのです。具体的には、避難路を車いすで行けるように整備するとか、そういったようなことを全部含めて、高齢者の避難を実現させるためのものが基本的にある。

ちなみに、「津波てんでんこ」で置いて行かれる側にとってその受け入れは、最終的には、倫理的には義務を超えるものということですよ。ですから、友人を含めて他者のために自分の命を捨てるとするのは非常に美しい徳ではあるけれども、普通は英雄的とか聖人と言われますから、義務を超えるものであって、やれば称賛に値するけれども、やらなかったからといってその人を責めることはできないということ

がある。そこが倫理的に一番重要なポイントだと思うのです。

その上で、しかしやはり時代が基本的に違うのだと思います。そのために、われわれは平時からどうすればいいか考える必要があります。だから、文科省がもうこれでいきましょうというのが、ちょっとナンセンスだと思うのです。できるだけ多くの人、理想としてはみんなを救うためにどう備えていくかということをやった上での話ではないかと思います。その点を言いたかったのです。

【司会】 児玉さん、いかがですか。

【児玉】 昔のほうが1人で動けなかった人が割合としてどのぐらい少ないかというのは分からないのですが、今に比べたら高齢者が少ないというのはそうだろうと思います。おっしゃるとおり、「津波てんでんこ」だけを実施するような共同体には、私もできれば住みたくないと思います。できれば、高齢者と動けない人、自分では助けられない人をどうやって助けるかを考えて備えておくべきでしょう。事前にいろいろな準備が必要だと思いますが、高台に住むだとか、いろいろなことが考えられると思います。それをした上での「津波てんでんこ」で、これだけあれば災害は何の問題もないというわけでは全くありません。そのところは、自分で補足できなかったので助かりました。

義務に基づく、超えるという話は、十分理解できたか分からないのですが、「津波てんでんこ」の重要なところは、共同体の合意に基づいてそれをルールとして採用することだと思います。1人だけやったり、多くの人がそこから離脱したりすると、ルールとしての意味がありません。ですから、みんながそれを約束としてやるのが、コミュニティにとってもそのルールを取る意味があるようにすることになるのではないかと思います。

【司会】 集合行為としての合意の倫理ですね。

【児玉】 そうですね。

【司会】 ありがとうございます。引き続き、児玉さんに質問です。随時、小田さんと久田さんも突っ込みを入れてくださると思いますが、ここからは、児玉さんの議論に矛盾があるのではないかという指摘を含む



質問です。「第二の状況で、誰かが助けているかもしれないから、津波てんでんこに従って自分は逃げるべきだというのは、誰かが津波てんでんこに従わないことを期待することにならないでしょうか。津波てんでんこの徹底と矛盾する気がするのですが、いかがでしょうか」。

【児玉】 一番厳しい山下さんは、誰も助けるなど、もうとにかく何があっても目もくれず、家財なども、他の命というのも、絶対に無視しろとおっしゃっています。山下さんによれば、今の「津波てんでんこ」の教えは甘い。小中学校では、周りにいる人を助けながら行きましょうという甘いことを言っているが、そんな甘いことを言っているはいけない、という一番厳しい立場を取っています。そこまでやるかどうかは別なのですが、基本的には私も、てんでばらばらに、助けずに行くべきだ

と思います。

もう1つ、付け足したつもりだったのですが、専門職の人は別の倫理を持つべき、あるいは、専門職独自のルールをつくるべきだと思います。専門職の人が全員殉職するのがいいとは全く思わないのですが、そのために仕事に就いた人は、可能な限り救助活動を行い、自分の命が危なくなる場合の判断は、その専門職の中でルール化されたことに従って行うというのがよいと思います。そういう人たちが一定数いないと、「津波でんでんこ」は十分に働かない。そういう人たちがいるからこそ、他の人たちが逃げられるというはあると思います。どの程度の専門職の人がいるべきか等、重要なところを詰めなければいけないのですが、原則はそういうことを考えています。

【司会】 久田さん、今の点に関してはいかがですか。

【久田】 むしろ詳しい方がいたら教えてほしいのですが、普段から「殉職覚悟で」と言われている人たちは自衛隊ですかね。その一部としての、例えば防衛医大系のドクターやナースも、たぶん自分の命よりも国民を守れという考えがあると思うのですが、もう少し一般に近い町医者や学校の先生はどうでしょう。

ちょっと話が飛びますが、児童の誘導を間違えて、30人以上の命をなくしてしまったということですごく非難されている先生がいます。自分が親だったら非難するだろうと思います。でも自分がその先生だったら、子どもを死なせるつもりでこっちへ行けと言ったわけではない、たまたまそっちがそうだったと弁解すると思います。あのレベルの人たちは、一体何を基準に動いていけばいいのかというのは、決まっていけないのではないですかね。でも、それは都道府県別とか市町村で決めるのではなくて、もっと国レベルからグローバルなスタンダードが必要なのではないかと考えているのですが、医療倫理の中で何かそういうものはありますか。

理想的な倫理として、ドクターやナースは、1メートル先に溺れそうな人がいたら自分の身を捨てても、危険を顧みず助けるべきであるけれども、だからと言って、そうしなければ刑務所に行けとは言われ

ていないですよね。その辺、何か関連する倫理的な行為みたいなものはありますか。

【児玉】 医師が患者を診る義務はあると思うのですが、ただ、こんな状況では適用されないでしょうね。正当な理由があれば、医師が患者を診る義務は免除されると思います。

消防隊員も人命救助のために普通の人よりリスクを取る必要があると思うのですが、問題は、今回はボランティアの消防団員がたくさん亡くなったということです。こういった状況で、自分の身も助かることを考えつつ、どうやって救助活動をするか、というルールが全然決まっていなかったと思うのです。それで、たくさんの人が、ある意味で、やりすぎて亡くなったと思うのです。そこをちゃんとせずに、命を懸けて人々を助けろというのは、相当無理があると思います。ですから、専門職の中でのルールづくりというのは、別個に非常に重要だろうと思います。

医療者に関しては、ちょっと難しいです。医療者は、もちろんDMAT等がありますが、普通に看護師とか病院で働いている人は、災害のときに人を助けるということはないので、そのときにどうするかというのは、まだ全然議論がないのではないかなと思います。ただ、新型インフルエンザが流行ったときにどういう行動をするかは、内閣府でも検討されています。そのときに医療者の義務がどこまであるかという話が議論になっています。

【参加者 A】 児玉さんの話の中で、消防士が「自分なら絶対行く」とかという話があったのですが、これはたぶんボランティアの消防団員だったのではないかと思います。本当のプロなら、そう言わないと思うのです。今、われわれがニュースを見ていても、海や山で遭難があったときに、吹雪の中に行きませんよね。二次被害を発生させないように、天候の回復を待ちます。先ほど言ったように、自分を犠牲にして助ければ、それは美しい話になるけれども、そこまでは求められていない。専門職は、一般の人と違って患者やいろいろな人に対して責任が重いわけですが、その限度を超えた場合には、それは回避されると思います。

ですから、先ほどの久田さんの講演の中で、院長が原発の爆発の後、「ここからはボランティアだ」とおっしゃった意味は、ここからは医療職としての義務を超えるから自分で判断しなさいという意味に、私は受け止めたのですが。たぶんそういう場面もあるのではないかと思います。

【司会】 関連するコメントをいただいておりますので、ご紹介します。「公立病院の看護師です。公立病院のルールとして、災害時は所属の病院へ行く、あるいは県庁へ行くとのルールがあります。しかしながら、勤務しておらず、自宅にいるようなケースでは、私は家族を優先し、集合しないと思います。また、自宅あるいは自宅近くで専門の職業としてボランティア活動を行うということでもいいのではないかと考えていますが、いかがでしょうか。」これは、久田さんに対するコメントです。全部合わせて、お答えがあればいただけますか。

【久田】 病院単位でも、何か基準があれば、はるかに動きやすいと思います。「あとは自分で決めてください」というのが一番判断に困る指示だと思います。

今回の被災地でも、そのとき病院でまさに患者さんのケアに当たっていた人、夜勤が終わって帰ってもいいのだけれどもまたまた残ってしまった人、これから来る夜勤の人、完全に休みの人と、これがまた色分けされるわけで、もっと言えば本当にきめ細かな、その場合は誰が来て誰が自宅待機でいいのかということまでは決めなくてはいけないと思いますが、何しろ「放射能が降り注ぐぞ!」と言われたときに、果たしてどんな状態になるかというのは誰も経験したことのない異常事態で、戦争に匹敵するような、突然敵が攻めてきた場合のような状況だったということですよ。だから、難しい話です。

【司会】 なかなか重要なポイントだと思います。A さんのご指摘も重要だと思います。専門職だからこそ、やれることは厳しく限定されている。それを忠実に、おそらくこのお医者さんは「ボランティア」と表現した。しかし、それが逆に、救助の自己責任というか、利他行動への自己責任の重荷のようなものを生んでしまう。かなり難しい問題を含んでい

ると思います。

それでは、もう1回、児玉さんへの質問に戻ります。「自分が他人を助ける義務を持った職業にある場合は別にするということは、津波てんでんこイコール利己主義を認めていることになるのではないのでしょうか。要するに、他の人は利己的に行為せよということではないのでしょうか。例外なき避難が津波てんでんこの本来の原則だと思います。」

それから、類似のコメントを紹介します。「てんでんこは利他的だと言えるでしょうか。特に3つ目のジレンマ、寝たきりの親、つまり明らかに自分で逃げられない人間を前にてんでんこすることは、利己的ではないのでしょうか。それは道徳的に非難されないのでしょうか。」「放射能てんでんこはあり。」というコメントも付け加えられています。いかがでしょうか。

【児玉】 2つとも同じ方向でお答えしたいのですが、「津波てんでんこ」で行動するときに、実際にどういう気持ちを抱いているかというのは、私はそれほど重要ではないと思っています。重要なのは、一番多く生命を救うためにどういうルールを人々が持つべきかです。繰り返しになるのですが、一般の人は「津波てんでんこ」に従う。専門職の人は、可能な限りで人々を助けて、自分の命が危なくなったら逃げるというルールを大枠では持つことで、一番多くの命が助かる。どうやったら一番多くの生命を助けられるかという目的の中で考えると、一般人は「津波てんでんこ」、専門職の人は別のルールということですので、一般人の人はそれによって利己的になるわけではないのです。

その場合にも、人々が利己心から逃げているかどうかというのは、厳密には重要ではないと思います。状況3についても、やはり同じように思います。重要なのは、多くの人をどうやって助けるルールづくりができるかということだと思います。

答えに満足なされないかもしれませんが、もし質問があれば、よろしくお願いします。

【司会】 極端に言ってしまうと、動機や意図が利己的であっても構わないということですね。

【児玉】 はい。

【久田】 突っ込みでもないのですが、子どもたちは、「とにかくしゃにむに逃げろ」、「自分が全てだと考えろ」ということですね。でも、その子どもたちの中で、戸惑っている人や防災教育が行き届いていない子どももいるでしょう。そんな子らに対して、それこそ消防団が「お前ら、逃げろ。自分はもうしばらくいるから。」と言うべきだということですね。こんな役割分担も可能だなと思います。それは、最終的には、「ゼロにはできないので減災を」という発想と、たぶん合致しているのではないかと思います。

全員救うのは無理かもしれないけれども、1人でも多くの命を救えばいいということで、先ほど述べたような、とにかく逃げる人、その逃げる人をちょっと待ってサポートする人、もうちょっとぎりぎり



まで残らなければいけない人のように色分けできるのではないかと思います。ただ、一方で、減災というのは、何かちょっと冷たい感じがするのです。何人かは犠牲になってもしょうがないみたいな。それは話が飛びすぎるのかもしれませんが、倫理学者に聞いてみたいです。特に功利主義的な人にとってどうなのでしょう。

【児玉】 一部の人が犠牲になるというのが冷たい、ということだと思いますが、今回、時間の関係もあって入れなかったのですが、同じような功利主義的に指示するルールとして、トリアージというものがあります。秋葉原の事件や福知山線の脱線事故の時もそうでしたが、われ先に来た人から治療するよりも、重症度に応じて、本当にすぐに治療が必要な人から治療した方がより多くの命が助けられる。そういう形で、一見非人間的に見えるので非難されるわけです。特に、蘇生しても生き返らない、あるいはもう駄目だという人に関しては治療を行わないので、そういう人の家族が、「なぜ治療しなかったのだ」ということで非常に大きな問題になります。そういう意味では非人間的なのですが、より多くの命を助けるにはトリアージが重要だと思います。

同じような形で、「津波てんでんこ」というルールが考えられるのではないかと思います。冷たいと見えるのは、たぶんその通りなのだと思いますが、例外的というか、かなり究極的な状況においては、そういうものも必要だろうと思います。

【司会】 児玉さんの議論に対してまだ矛盾点を突くお話というか、囚人のジレンマのアナロジーの妥当性に関する質問があります。

一つ目です。「囚人のジレンマと津波のジレンマについて。囚人のジレンマの場合は、行為者には見えないが、われわれは確実な結果を知っているという状態であるのに対して、津波のジレンマは、あくまでも行為者とわれわれ両方にとって、結果というのは likelihood（起こり得る、蓋然性）でしかない点で、アナロジーが通じるのでしょうか。」

二つ目です。「囚人のジレンマは、共有地の悲劇の後を受けて、相互に連絡のないプレイヤーは自己のことを考えて行動するので、結局は全体のためにもプレイヤーのためにもならないという意味を持つもの

と思います。囚人のジレンマを津波状況に当てはめることは無理ではないかと思いますが、いかがでしょうか。」おそらく両者ともポイントはよく似ているのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

【児玉】 確率、蓋然性の要素が入ってくるのは、そうだと思いますし、どこまでアナロジーが成り立つかというのも重要です。ただ、私が強調したかったのは、それがうまくいくか分からないのですが、先ほど司会の奥田さんが指摘しましたが、集団的な合理性と個人的な合理性というのが一致しない場合があるということです。囚人のジレンマなどは特にそうなのですが、個々人が合理的に行動しようとする、結局、誰にとってもよくない結果になるということです。「津波てんでんこ」のときも同じような状況が起こり得るということが言いたかったのです。それを克服する方法もよく似ていて、囚人のジレンマは1回きりだとうまくいかないということになるのですが、繰り返しのときは協力したらいいという話が出てくると思うのです。それは、お互いに裏切らないという信頼関係を築くことが重要だということが似ていると思います。でも、違っていても構わない。「津波てんでんこ」を考える上で、囚人のジレンマとの違いを考えつつ、理解していただければと思います。全く一緒と言うつもりはありません。

【司会】 後者のほうの質問は、今の回答でよろしいでしょうか。私も若干質問の趣旨をつかみかねているのですが、質問者の方、簡潔にポイントをおっしゃってくださればと思います。

【質問者 B】 一言で言って、忘れていただいて結構です。というのは、質問した後に考えたのですが、結局、囚人のジレンマにしろ、共有地の悲劇にしろ、それを引っ張り出して何の意味があるのか、というのが私の論点です。

結局、囚人のジレンマは、それぞれの人間が勝手に動くよ、ということです。囚人のジレンマというのは、結果は分かっている。2人ともそれぞれ相手を裏切って自白すれば、2人とも非常に重い刑になることはない。それでもそっちへ行かざるを得ないのだよ、結果が両方分かっているでもそうなるのだ。要するに、自分の利己心の強さに従っ

て人間は動くものだ、だからどうする、という話だったんですね。だから、児玉さんの言われているそれぞれの比較とは全然問題が違うのではないかと。それを後で思い付きました。ですから、先ほどの質問は忘れていただければと思います。

【司会】 今のでもう一回、回答する必要が出たような気もしますが。

【児玉】 もう少しよく考えてみます。

【司会】 ありがとうございます。続いて、小田さん、児玉さんに、どこまで利他的であるべきかに関する質問です。「私たちはどこまで利他的であるべきか」というテーマ設定も、今回の話では可能だと思いました。その観点からすると、小田さんに対して質問ですが、どこまで利他的であるべきかという調整機能あるいは防衛機能といったものは働くのでしょうか。利他の程度などは、経験的に身につけたものなののでしょうか。その点に関して何かあればお答えください。」では、まず小田さんへのご質問に対してお答えをお願いします。

【小田】 利他的であるべきかどうかというのは、生物学者の仕事ではないので何とも言いようがありません。われわれとして興味があるのは、「なぜそうなっているのか」であって、「どうするべきか」という問題ではないので、それはよく分からないのですが、ひとつ関心を持っているのは、利他性の個人差です。

皆さん、いろいろな性格とか、行動パターンにも個人差があるわけですが、われわれのところで個人の利他性を測る尺度をつくったところ、やはり高い人と低い人がいる。これは何なのかというのは非常に興味がありまして、今いろいろ考えているところです。

例えば、私の共同研究者は、遺伝の影響を調べています。双子を使うと、どれぐらいそういったばらつきに遺伝的なものがあるかということが分かるのですが、調べてみると、それなりに遺伝的な要因もある一方で、環境要因もあるということが示唆されています。

例えば、最初の方でいろいろお見せしたスライドにもありましたが、友達から普段助けてもらっている人は、友達を助けるわけですね。これを社会的ニッチと言ったりするのですが、そういう社会的環境にい

る人、要するに、自分が他人に対して何かをすると、それが返ってくるような環境にいる人は利他的に振る舞うだろうし、そうではなくて、例えば、友達に何かしても全然返ってこないような社会的環境にいる人は、利他的に振る舞わなくなるだろうというのはあると思います。ですから、やはり社会的環境ですよ。例えば、どういう社会的ネットワークに置かれているか。

社会的ネットワークの研究結果でも、利他的な人同士は付き合いがあるわけです。そういう利他的な人同士で固まっている。それによって、互惠性や間接互惠性が担保されるというのがあるので、今興味を持っているのは、どういった社会的環境に置かれているか、それでどういう個人差が出てくるかということです。

【司会】 ありがとうございます。続いて、児玉さんに対して質問です。これは久田さんにもコメントをいただけたらと思います。「専門救命職以外に、教員と生徒あるいは学生、上司と部下、店員と客といった関係において、生徒や部下や客はてんでんこでいいと思うのですが、教員や上司や店員はそれを見届ける責任があるのではないかと思うのですが、どのようにお考えでしょうか。」お前はどうかんだ、という意味も質問に含まれているかもしれません。

【児玉】 …大学教員は難しいですね。ここで重要なのは、何回も言うのですが、個々人で判断するのではなく、ルールをつくらなくてはいけないということです。その場で、「私はこう思う」「私はああ思う」で、一部の人は残って、一部の人は残らないとなると困ります。ですから、本当に助ける側に回る人は、それなりの教育を受けて、そのときにどういう指導をするかをちゃんとわかっていなくてはならない。小中学校の先生は該当すると思いますので、それはちゃんとやるべきだと思います。ですから、誰が助ける方に回るのか、誰が他の人を気にせず逃げられるのかというのは、相当議論しておく必要があると思います。

新型インフルエンザのワクチンもそうなのですが、一体誰が予防接種を先に受けるのかとか、かなり細かくルールを決めないと、本当に問題が起きたときにすごく混乱すると思います。ですから、繰り返し

になりますが、事前に誰が助けるかは、ある程度みんなで議論することだと思います。教員の中でもそういうグラデーションがあるだろうということです。

【司会】 久田さん、お願いします。

【久田】 今の質問で思い出した事例が2つあります。1つは、イタリアの豪華客船が地中海のクルージングに出て座礁したとき、船長が真っ先に、しかも愛人と一緒に逃げ出したという話。これは誰が見ても非難されるべきことだろうと思います。船に異常があった場合、船長は最後まで残るべきだということが、たぶん船舶に関する法律にはあるのでしょうね。

もう1つは、当日の東京ディズニーランドの対応です。利他というよりも、あれはホスピタリティということになっています。地震があり、お客さんがたくさんいて、交通機関が遮断されました。すごく寒い夜を過ごさなければいけなくなりました。店員たちは自主的な判断で、ぬいぐるみやらTシャツやら、グッズをかき集めてお客さんに配って、食糧も確保して、2日か3日いたということです。美談として語られています。

ついでにもう1つ。例えば、小学校の先生でも意識に温度差と言ってもいいようなものがあると思います。首都直下型地震が起きるだろうと言われていますが、小学校3年の担任の先生がクラスで算数を教えていて大きな揺れが続いた場合、その先生は逃げるのか、自分のクラスの子どもを最後まで守り続けるのか。ある養護学校の教員の話です。肢体不自由の子が担当だそうで1人では動けない子どもばかりです。彼の発言にちょっとびっくりしました。「今学校は、緊急避難所になれるように、改修されているんだぞ。ということは、俺たち教員は最後まで残れということだ。これはとんでもない話じゃないか。」とその先生が言ったので、「その考え方こそとんでもないじゃないか」と言いたかったのですが押えました。自分たちの責任の範囲を自覚していない教員もいるわけです。都道府県によっても、市町村によっても全然違うと思いますし、私立はどうなるのか、公立はどうなるのかとい

うこともあると思います。

僕は、大学の場合は、ある程度学生達を守る義務があるような気がします。少なくとも上智大学では、先日台風が来たときに、「まず、学生諸君は早く帰路についてください。教職員は、それが終わったら改めて放送しますので待機して下さい。」という放送が入ったので、われわれ教員にも責任があるのだと思いました。

ちゃんとした答えになっていないのですが、専門職に就いた段階で、しかもそれが対人援助職の場合、先程のトリアージがいい例ですが、あれは4段階だったのでしょうか、どういう状況でどこまでということはある程度決めるべき時代にもう来ているのだと思います。

余計なことですが、トリアージで、処置不能に黒いタグはやめたほうがいいですね。もう少し暖かい色にしたほうがいいです。いかにも「駄目です」みたいな色を付けると残酷ですよ。爽やかな色を付けて「さようなら」と言って差し上げる。逆にもっと激しい色を付けて対処する方がよいと思います。

【小田】 非常時にそれをやるというのは、心理的にどうなのですか。

【久田】 やった人はすごいトラウマです。だから、状況によっては延命処置が無駄だと分かってもやるというドクターもいると思います。たとえば親がもうすぐそこまで駆け付けている小学生の子どもがいて、完全に心肺停止状態だけれども、親と対面するまでは、他の助けられる人を犠牲にしてその子どもを処置するというようなことです。法律違反になるのでしょうか。大災害の場合、そんなこともありえます。

【司会】 引き続き、久田さんに対する質問です。「専門援助職の人たちが、自責的心的外傷を持った場合に、どのような治療対処をなさっているのでしょうか。」

【久田】 これが唯一正しい治療方法だというのはありません。ただ、大まかに言うと、患者さんとの間でその人がやったことを振り返る時間を意図的につくります。リラックスした雰囲気の中で自分の行為を振り返りつつ、今は認知療法と呼ばれる方法が主流ですが、自分がした判断の基準が実は適切ではなかったのではないかと考え直していきます。

原因の帰属を自分の能力のなさにはあなたは位置付けているけれども、本当はそうではなくて、こういう状況だったからこうなったのではないかというように、話し合いの中で解決していくという方法が、おそらく今、一般的にやられていることだと思います。

【司会】 ありがとうございます。これが質問用紙に書いてあるものでは最後ですが、小田さんへの質問です。これはたぶん答えにくいので、どういう答えになるのか、私も興味深く思っています。「今後、人間は助け合いについてどのような進化の方向に進むと思われますか」という質問です。よくこういう質問を受けるのではないかとと思われるのですが、お答えください。

【小田】 生物の進化は、偶然の積み重ねなんですね。最初に進化の説明で言ったように、基本的には偶然の変化が積み重なって、今のわれわれがいるわけです。もちろん自然淘汰があって、それぞれの環境に対して適応して機能的になるのですが、ではその環境がどう決まっていくかということ、これも結構偶然の要素が大きいわけです。例えば、隕石が衝突したとしたら、もう全然変わってしまいます。

そういうわけで、進化は偶然の積み重ねで、決して進歩ではないので、よく分からないとしか答えようがありません。それこそ私も、この先どうなるかというのは非常に興味があるのですが、さまざまな偶然の積み重ねで現在のわれわれがいるので、おそらく将来も、さまざまな偶然の積み重ねで、よく分からないところに行くのだらうというのが答えです。

【司会】 ありがとうございます。ちょうど時間ですが、書けなかったけれども、今の話を聞いて一言質問したいという方がおられましたら、2件ほど受け付けたいと思います。

【参加者 C】 久田さんにお尋ねします。確か福島ではなくて北茨城のほうだったと思うのですが、学校給食が信頼できなくなって、親がお弁当を作っていたというニュースを見たことがあるのですが、あの辺の心理について、何かコメントいただければと思います。

それから、児玉さんにもお尋ねします。「津波てんでんこ」ですが、

もしそのときに、みんなに「逃げるぞ！」という声を掛けながら逃げた場合には、本当にそれが利己的なのか、自分のためだけのものかと言えるでしょうか。

そして、小田さんに質問です。唯一断言できることは、人間は必ず死ぬということだと私は思っています。そういう意味で、自分の命よりも他者を思いやる行動、利己的とか利他的な行動、利益ということではなくて他者を思いやれる心の尊さについては、小田さんはどのようにお考えか、お答えをお願いしますか。

【司会】 では、久田さんから順番をお願いします。

【久田】 北茨城の事例については詳しくないのですが、そこから連想したことでご勘弁ください。僕が入ってお手伝いさせていただいている病院でも、何日か避難はしたけれども戻ってきたスタッフもいらっしやるわけです。その場合「よく戻ってきたね。誰でもあんなときは避難するよ。これから一緒にやろう。」と言ってもらえる人は、もともと利他的に動いている、つまり信頼感が持たれていた方みたいですね。一方で、そういうものがない人の場合は、周りが非難して、例えば「卑怯者」みたいな言葉も出る。つまり、利他的行動が結局信頼につながり、それが時に利己的行動になったとしても、積み重ねさえあれば大きな問題にならないと捉えていいのではないかと思います。

【児玉】 繰り返しになるかもしれませんが、「津波てんでんこ」の一人一人の行動は、一見して利己的な行動なのですが、それは全体のたくさんの命を助けることにつながります。ですから、「逃げるぞ」と叫ぶこと自体は全然構わないと思います。利己的になれというわけではなく、利己心からやれというのではなくて、「一見利己的な行動をやるべきだ」というわけなので、そのついでに「逃げるぞ」と言うのはいいと思いますし、今回の釜石の件でも、小さい子がたくさん逃げていたから、みんなつられて逃げたという効用もあるようです。

【小田】 われわれ全員必ずいつかは死ぬのですが、ただ、遺伝子が残るのですね。われわれの進化生物学的な考え方では、個体は死ぬけれども遺伝子が残る。遺伝子が残るような行動というのが残っていく。ただ、

各個人は別に遺伝子のことを考えて行動しているわけではないわけです。そこに矛盾というかズレがあって、たぶんこういった災害とか人の命に関わるような問題が起きたときに、そのズレから、今日議論してきた、「津波でんでんこ」のような心理・倫理の問題が出てくるのではないかと考えています。

【司会】 もうお一方どうぞ。

【質問者 D】 阪神・淡路大震災と東日本大震災を比較すると、阪神・淡路の地震は朝5時40分頃に起きて、今回の場合には午後2時40分頃だったと思います。結局、大きな違いは、阪神・淡路の場合には家族が大体そろっていましたが、東日本の場合にはかなりばらばらになっていて、今日出ているような話は、阪神・淡路の地震の後にはそんなに出ていなかったように思います。それは、もしかすると、家族がばらば



らになっていた今回の震災の場合、助けるべきか、探すべきかという決断が、より重要だったのではないかという思いがあります。

また、話を聞きながら私が思い出していたのは、私の祖国、オーストラリアのことですが、オーストラリアでは山火事と洪水がよくあります。私がまだ若いころ、あの時代はまだ冷房がないので、夏の非常に暑い時期、人々は川に入って泳ぐ時間を多く取ったので、溺れ死ぬ人が結構いました。人が溺れかかったときに、飛び込んで助けるべきかどうかということがものすごく議論されて、今日の話題に似た話になったのですが、自分が人を助ける訓練を受けていなければ、相手が自分の娘でも、息子でも、自分の妻の場合でも絶対に入るな、という話になっていたのです。

それはなぜかという、溺れかかっている人はしがみつから、2人とも一緒に死んでしまう結果になるからです。ですから、助けに行くことによって、本当に自分は相手を助けられるのか、自分も一緒に死んでしまうのでは何の意味もないのではないかという、「津波でんでんこ」支持論と根本的に同じ議論ではないかと思います。

私がその話の中で欠けていると思ったのは、状況を考えて、助かる可能性がどのくらいあるかと判断する場があってもいいのではないかということです。「てんでんこ」という考え方でいけば、同じ家にいれば、近くにいれば、たぶん助けられるだろう。けれども、離れていれば、たぶんできない。助かる可能性を判断する必要があるのではないかと思います。そこに違いがあるのではないかと思います。

【司会】 児玉さん、お願いします。

【児玉】 津波の来るまで時間はいつも同じではないと思うのですが、最初の例えば10分間は助ける方法を考えるということを言う方もいらっしゃると思います。その一方で、それに対する反論として、その場で何かを考えだすと、特に非常時には間違える可能性があります。ですから、なるべくルールはシンプルにすることが重要です。例えば確率などを考えだすといろいろな行動の仕方が考えられるのですが、なるべくそういうことをシャットアウトするということも、一方では重要

だと思います。ですから、シンプルさを追求しつつ、今おっしゃったような助けられる可能性も考えられるようなルールづくりをする必要があると思います。オーストラリアの例も非常に興味深かったと思います。ありがとうございました。

【司会】 これで質疑・全体討論の部は終わらせていただきたいと思いますのですが、まだ読み上げていなかったコメントで、まとめるような、今の児玉さんの話につながるようなものがありますので、それを紹介して締めとさせていただきます。

「児玉さんが、倫理的分析というのは、避難の指針について混乱や疑念をなくすためにも不可欠とおっしゃっていましたが、さらに以下のようなことにも役立つのではないのでしょうか。つまりそれは、多様な状況にあることを人々が相互に確認し、その下にそれらの状況に対応した避難のための社会システムを人々の協力によって再構築することへの可能性を開くことにもつながっているのではないのでしょうか。」

こういうシンポジウムを開くということもそうだと思いますし、皆さんに足を運んでいただくことも含めまして、利他行動を考えて話し合うということは、われわれがどういう社会をつくっていくかということにも深く関わっているのではないかと、私も今日の皆さんの議論を聞いていて思いました。皆さん、どうもありがとうございました。■

講演者紹介（収録順）

丸山 雅夫（まるやま・まさお）

南山大学社会倫理研究所所長／大学院法務研究科教授。専門：刑事法、少年法。

青木 清（あおき・きよし）

上智大学生命倫理研究所所長。専門：生命倫理。

町野 朔（まちの・さく）

上智大学生命倫理研究所教授。専門：刑法、医事法、環境法、生命倫理と法。

奥田 太郎（おくだ・たろう）

南山大学社会倫理研究所第一種研究所員／人文学部准教授。専門：倫理学、応用倫理学。

小田 亮（おだ・りょう）

東京大学理学部卒業。東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻博士課程修了。博士(理学)。その後、京都大学霊長類研究所教務職員などを経て、現在、名古屋工業大学准教授。専門領域は自然人類学、比較行動学。著書に『利他学』（新潮選書、2011年）、『ヒトは環境を壊す動物である』（ちくま新書、2004年）、『約束するサル 進化からみた人の心』（柏書房、2002年）など。

児玉 聡（こだま・さとし）

京都大学文学部卒業。京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻博士後期課程 研究指導認定退学。博士（文学）。その後、日本学術振興会特別研究員（PD および SPD）、東京大学大学院医学系研究科医療倫理学助手、同講師を経て、現在、京都大学准教授。専門領域は倫理学、生命倫理学、政治哲学。著書に『功利主義入門—はじめての倫理学』（ちくま新書、2012年）、『功利と直観—英米倫理思想史入門』（勁草書房、2010年）〔平成23年度和辻賞受賞（日本倫理学会）〕など。

久田 満（ひさた・みつる）

上智大学文学部卒業。慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程 満期退学。博士（医学）、東京大学。その後、東京大学助手、東京女子医科大学助教授、同教授を経て、現在、上智大学教授。専門領域はコミュニティ心理学、臨床心理学。著書に『医療現場のコミュニケーション』（あいり出版、2008年、共著）、『コミュニティ心理学ハンドブック』（東京大学出版会、2007年、共著）など。

編者

奥田太郎

鈴木 真（すずき・まこと）

南山大学社会倫理研究所第一種研究所員／人文学部講師。専門：哲学、倫理学。

私たちは他人を助けるべきか—非常時の社会・心理・倫理

2013 年 3 月 31 日 発行

編 者	鈴木 真・奥田太郎
発行者	南山大学社会倫理研究所 名古屋市昭和区山里町 18 〒466-8673 電話 (052) 832-3111 (代表) 代表者 丸山雅夫 E-mail: ise-office@ic.nanzan-u.ac.jp http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/ISE/
印刷・製本	株式会社ウエルオン
装 丁	株式会社サウザンドデザイン

私たちは他人を 助けるべきか

—非常時の社会・心理・倫理

Lecturer

Title

小田 亮

人はなぜ赤の他人を助けるのか？
——「おせっかいなサル」の行動学

児玉 聡

津波てんでんこと災害状況における倫理

久田 満

専門援助職が助けられなかった時
—— 災害時の援助職における罪悪感とその対処